

学級経営からみた総合的な学習の時間存在の意義

— 5年総合「古里の道」の実践から —

飛弾 直樹*・松本 謙一

Significance of the period for integrated study from the viewpoint
of the classroom management

— On the practice of Five years' Period for integrated study
"way of a Furusato" —

Naoki HIDA and Ken-ichi MATSUMOTO

キーワード：総合的な学習の時間、学級経営、自己評価、生き方

keywords：Period for integrated study, Class management, Self-valuation, Way of Life

I 研究の目的

1 能力・資質を中心に議論されてきた総合

文科省は、2008年度の学習指導要領改訂において、「探究的な学習」という言葉を、総合的な学習の時間（以下「総合」という）の目標の中に新たに付け加えた（文科省2008⁽¹⁾）。これにより、基礎的・基本的知識・技能の定着やこれらを活用する能力の育成をねらう教科学習に対して、体験的な学習に配慮した探究的な能力の育成を総合が担うというように、教育課程上における総合の存在意義を明確にされた。

総合が創設されてから、14年。これまでも、総合でどのような力が身に付くのかという議論は数多く行われてきている（例えば田村、原田2009⁽²⁾）。現在でも、学力低下問題の元凶として時折総合が批判されることもあるが、PISA型読解力の向上（例えば北村2007⁽³⁾）や、OECDの主要能力であるキー・コンピテンシーの育成（渡辺2010⁽⁴⁾）など、総合が、今後日本が求める国際標準の学力向上に大きく寄与するという指摘も多い。

このように、総合に対する見解は今日も様々だが、共通していることは、子どもにどんな力が付くのかといった、個人としての能力・資質の面を中心とした議論という点である。確かに、国語や算数といった教科の時数を減らしてまで設けた総

合である。保護者や社会への説明責任を果たすためにも、それは当然のことといえよう。

しかし、教育の目標には、集団の一員としての人間性や社会性を育てることもあることを忘れてはいけぬ。このように2つの究極的な目標があることを考えると、これまで数多く総合について議論されているのは「個人としての能力・資質」が大半を占めているのではないだろうか。「豊かな人間性や社会性」という側面から総合については、あまり議論されていないのが現状である。

そこで総合が、子どもたちの人間性や社会性の育ちにどんな意味をもつのか、そのことを考えることが、今後の総合の教育課程上における意味を、一層高めることにつながると考えた。

2 総合の価値を問い直す

豊かな人間性や社会性は、全教育活動の中で培われるものであるが、その基盤は、学級経営の充実にあると筆者らは考える。一人一人の子どもには、それぞれ異なった能力、適性、興味関心があり、それらを互いに認め合い、支え合い、そして高め合えるような学級集団の中で学習指導がなされてこそ、豊かな人間性や社会性が培われると考える。

その意味において、「望ましい集団活動を通して、子どもの人間形成を図ること（文科省2008⁽⁵⁾）」を目標とする特別活動は、学級経営の充実に必要な役割を担う領域の一つであるといえる。

それでは、総合の充実は学級経営に対して、ど

*滑川市立寺家小学校教諭

のように影響するのだろうか。自分が見つけた問題を、自分なりの方法で、自分なりに納得がいくまで追究できる総合は、一人一人の個性的な学びが保障されている時間である。つまり、望ましい「集団活動」が前提になっている特別活動に対し、総合は「一人一人の探究」が前提になっている。このように整理すると、特別活動と総合の違いが際立つが、本来、よりよい集団を作ることと、個性を最大限に生かすことは、密接に関係していることから、総合は、特別活動との共通性、補完性も強いと考える。

学級には、異なった能力、適性をもつ子どもが多様に存在する。一人一人の個性を伸ばしたり、認め合ったりすることが人格の形成に大きく寄与すると考えるならば、個々の探究を重視する総合も、一人一人の異なる願いを生かすという点において、特別活動と同様に、いやそれ以上に意味があるといえるのではないだろうか。

そこで、本研究では、学級経営における総合の価値について、総合を強力におし進める富山市立古里小学校の1年間の尾島学級の育ちから検証し、その可能性にせまることを研究の目的とする。

II 研究対象としての選定理由

富山市立古里小学校は、富山県小学校教育研究会の総合の県東部地区の研究指定校である。この学校に勤務する、尾島教諭は、当時教員経験29年目であり、数々の研究授業や研究発表を行ったりするだけでなく、総合についての実践研究論文（尾島・松本2009⁽⁶⁾）を執筆するなど、富山県の総合の教育研究をリードするベテラン教員の一人である。これまでも一緒に論文を書いたり、学会で発表したりしている（例えば飛弾・尾島2012⁽⁷⁾）。また、筆者らと類似の価値観をもつ。

また、授業実践した年の4月から、新たに古里小学校に着任したこともあり、担任した5年生の子どもたちとの関係づくりも0からのスタートとなるため、総合と学級づくりとの関係性を年間を通して考察する対象として適していると考えた。

さらに、総合学習を行う上で、実践構想段階から筆者らと連絡を密にとり、授業と研究の一体化を図った。具体的には、尾島学級では、1学期に「古里校区的じまんの人（全15時間）」、2学期に「古里の道－昔と今－（全36時間）」と他教科とも合科にしながら

ら総合の学習を丁寧に行う計画を立てた。さらに、「生き方を考える」という総合の大きなねらいを達成させるために、年間を通して子ども自身の「自己評価」を一貫した方法で取り組むことを重視する方針とした。ここに尾島実践の特徴があり、子どもの育ちを分析する上での大切な視点があるといえる。そこで、本研究では、総合の単元学習を通して見られた子どもの変容と、自己評価を中心とした1年間の指導を通しての子どもの変容という2点から研究を進めていくことにする。また、単元学習における詳細な子どもの変化の見取りについては、2学期に行った「古里の道－昔と今－（全36時間）」を研究対象とする。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

- (1) 第5学年総合「古里の道－昔と今－」において、総合の特質を生かした単元構想、授業実践を行い、単元学習を通しての子どもを育ちを検証する。また、観察対象児であるM児やA児を中心に考察する。
- (2) 学級集団アセスメント（QU）や自己評価に関するアンケートを行い、1年間を通して見られた子どもや学級の育ちを検証する。また、2つのアンケート結果を総合的に分析し、学級経営における総合の価値について検証する。

2 研究の方法

【対象】

富山市立古里小学校5年1組（36名）で実施した、総合「古里の道－昔と今－」を対象とした。授業は、学級担任である尾島良幸教諭が行い、2人が参与観察した。

【分析】

授業は、飛弾が参与観察してビデオ記録を行い、授業記録やノート、アンケートの解析結果から、単元を通じた子どもの育ちについて考察を試みた。具体的には、授業カンファレンス（飛弾・松本他、現職教員、学部生ら計12名）を行い、考察の客観性を重視しながら2人で考察した。

また、図書文化から出ている学級集団アセスメント（QU）や自己評価アンケートを実施し、その結果から個や学級の育ちを2人で考察した。

【時期】

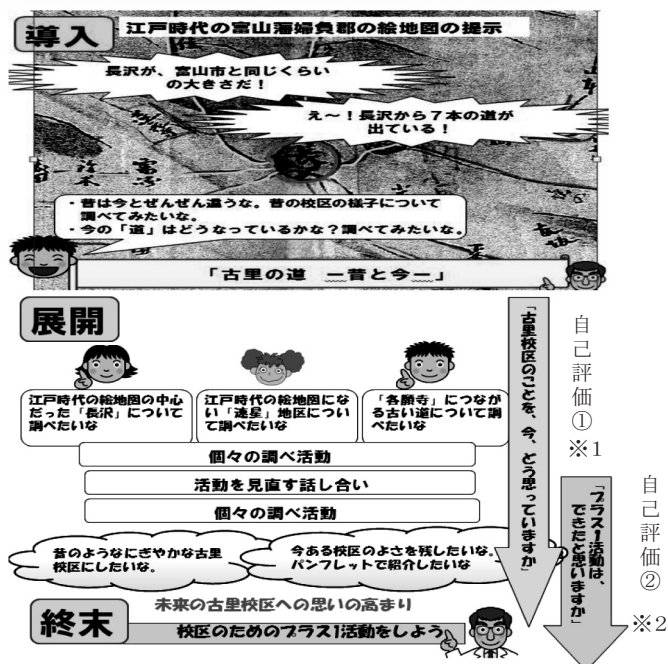
授業は、平成23年9月～平成24年2月にかけ

て36時間、授業カンファレンスは平成23年11月～平成24年8月にかけて合計8時間行った。QUは、平成23年5月と平成24年3月に2回行い、自己評価アンケートは平成24年3月に1回行った。

IV 単元の概要と自己評価のポイント

1 単元の概要

「古里の道－昔と今－」(全36時間)



【図1. 単元「古里の道－昔と今－」の概要】

(1) 単元の目標

校区の昔と今の姿を探ることを通して、豊かな自然や歴史のある地域の特徴やそれを守り受け継ごうとしている人々の思い、交通の変化に伴う現状の様子などに気付き、よりよい地域にしていくために自分にできることを考え、主体的に実践しようとする態度を育てる。

(2) 単元の導入について

単元の導入では、地域にある「道しるべ地蔵」を観察した後に「江戸時代の富山藩婦負郡の絵地図」を提示した(図1)。この江戸時代の絵地図には、校区の長沢から何本もの道が出ていたり、長沢の地名が富山市と同じくらい大きく書かれていたり、昔の古里校区が交通の要所だったことに、子どもたちは驚きを覚えた。子どもたちの意識が一つの方向を向いたこの段階で、教師は単元名『古里の道－昔と今－』を提

示し、「校区の道や道に関わることを通して、私たちの古里校区を見つめ直してみよう」と、単元のテーマを子どもたちに投げかけた。そして、子どもたちは、その投げかけを自分事として受け止め、古里校区の昔の「道」の様子を資料で確認したり、今の様子と比べたりしながら、気になることを調べ始めた。

(3) 単元展開について

子どもたちは、まず「道」の変化やそれに伴う人々の生活の変化(例えば、新しくできた道と交通量の関係…), 道沿いにある建物の変化、古里校区や近隣の校区との比較など、自分が興味・関心をもったことをきっかけに課題づくりに取り組み、調査活動を行った。

子どもたちが調査活動を進めている間、活動の節ごとに、入手した事実をまとめ分析するだけでなく、授業の終末段階で毎回地域の人と関わったり文献調査をしたりした結果、「古里校区について、今、どう思っているか(自己評価①)」を一人一人に問い直させた(図1※1)。これによって、子どもたちが別の活動に取り組んでいても、互いの思いを知りたいという願いをもって、話し合い活動を行うことができる素地になると考えたからである。

また、意図的に共通体験なども仕組み、友達と考えを交流させることで、追究を前進させたり、課題の見直しを図ったりすることができるようにした。

(4) 単元の終末について

探究が進むにつれて、子どもたちは「今の校区の現状に対し、自分にできることは何か」と、地域のよりよい将来について考え、行動する姿が少しずつ見られるようになってきた。そこで、1学期から学級活動で取り組んできた「学校のためのプラス1活動」を生かし、「地域のためのプラス1活動」をクラス全員で行った。

また、子どもたちが自分の成長や学習の成果を自覚し、達成感を味わえるように、一人一人が自分の学びをまとめるとともに、古里校区に対する思いの変容をノートに記させた。

2 自己評価のポイント

本単元では、子ども一人一人が探究を通して、総合の目標にもある「生き方を考える」ことができるように、「自己評価」を継続的に行った。な

お、授業者の尾島や筆者らは、総合の特質やねらいに直結するものとして、これまでも自己評価の在り方や、そのための教師の支援について検証してきた（飛弾・尾島2012⁽⁷⁾）。

以下に示すのは、本単元で取り組んだ自己評価とその特徴である（図2）。

自己評価①（図1※1）

「古里校区のことを、今、どう思っていますか」

〈自己評価の特徴〉

・単元の課題に直結した自己評価を、単元を一貫して行う。
活動の節ごとに、「今」の古里校区に対する思いを自由記述でノートに記す。

自己評価②（図1※2）

「プラス1活動は、できたと思いますか」

できたと思う できなかったと思う 分からない

※子どもは、上記の3つから1つを選びシールを張る。

〈自己評価の特徴〉

・終末段階で行う自己評価は、プラス1活動ができたと思う、思わない、分からないの気持ちを、赤、青、黄の3つのシールで表す。

・一人一人の主観的な自己評価は、表にして示す。これにより、仲間のことが気になる状況をつくることができ、それが学級全体で話し合う契機になる。そして、自己評価の物差しの違いが、仲間の姿から、自分の自己評価の仕方そのものを見つめ直す契機になる。

【図2. 自己評価のポイント】

V 結果の検証

ここでは、まず、授業実践で見られた子どもの様子から、単元学習が、どのような子どもの育ちにつながったのかを検証する。その後、総合の学習を進める上で、1年間継続的に取り組んできた「自己評価」の効果について、2人の観察対象児、M児、A児と全体の変化から検証する。

1 単元学習を通しての子どもの変容から

(1) M児の追究の考察

① 導入から課題をもつまでのM児

導入段階で、江戸時代の絵地図を見たときは、多くの子どもは、長沢からたくさんの道が出ていることから「昔の長沢は有名な場所だったに違いない」と予想を立てた。しかし、M児は、今の長沢がそんなに目立つ場所でもないことから、「本当に有名だったのかな？観光客も少ないし…もし有名だったら、きっと道の周辺に特別な建物があるに違いない」と考え、自分の追究課題を「古里校区の道沿いに並ぶ建物調べ」

とした。

導入段階でのM児は、今の校区のよさを十分に感じながらも、デパートに代表されるような都会的なはなやかな一面に、どこか憧れを抱いていたようである。そこで、今のデパートのような建物が昔はあったのではないかと考え、道沿いに並ぶ建物という視点から、今一度校区を見つめ直したいと考えたM児であった。

② 地域住民の思いから目指す校区を変容させたM児

課題を決めたM児は、住宅地図を用いて、建物の総数をチェックしたり歴史年表で建物ができた時期を調べたりといろいろな方法で、校区を有名にした建物について考える様子が見られた。また、10月4日のノートには、以下の記載があった（図3）。

今日分かったことは、古里校区の大きい建物38個中、宿泊施設は1つしかなかったこと※1です。大きい建物はけっこうあったけど、宿泊施設が1件しかなかったから、古里校区は、やっぱり有名ではないのかな。

【図3. 10月3日のM児のノート】

M児は、大きな建物は38件あったものの、宿泊施設が1件しかないという事実（図3※1）から、改めて、古里校区はあまり有名でないと感じていた。ここに、有名な観光地には、例外なく宿泊施設が多くあるという現代の様子と関連付けながら思考をめぐらすM児の姿を読み取ることができる。

また、M児以外にも、昔の校区の様子をもっと詳しく知りたいと願う子が多かったため、校区の歴史についてよく知っている公民館長さんに長沢地区を案内していただく場を授業者は意図的に設定した。以下は、10月7日の長沢探検後のM児のノートである（図4）。

昔の長沢には、しばい小屋や旅館、遊園地などがあることが分かりました。私は今回、長沢を公民館長さんに案内してもらって、意外と昔は都会だったんだなあ※1、じゃあどうして今は、有名じゃないのかなと思いました。変わっていった間に、何かあったのか調べてみたい。あと、今の長沢も、なろうと思えば都会に変身できるかも※2。

【図4. 10月7日のM児のノート】

公民館長さんから、昔の長沢に、芝居小屋、旅館、遊園地、料亭などがあったという事実を聞き「意外と昔は都会だったんだなあ（図4

※1)」と、長沢に対するイメージを明るい見方に変えたM児。その中で、「できることなら、昔のように、はなやかな町にしたい」と、導入時から抱いていた自分の思いを確かなものとし、改めて長沢に対する期待を高めたM児であった(図4※2)。

また、長沢探検後のM児は、今もなお、長沢で商店を続ける人に、昔のはなやかな様子や今の様子について、インタビューしてみたいと考え、2回目の長沢探検の計画を立てた。以下は、インタビュー後のM児のノートである(図5)。

インタビューに行った時、昔と今をどう思うか聞いたら、「昔はにぎやかだったけど、ファボーレができたことで今は、人通りが減ってさびしくなった」と言っておられました。それで、私もさびしくなりました。私は、昔のようにもどるのには難しいけど、古里校区を人通りのあるにぎやかな所にしたいです。そして、お店をやめられた方も、お店が続けられるようにしたいです※1。

【図5. インタビュー後のM児のノート】

近隣に、大きなスーパーが進出したことによって、今のような人通りが少ない長沢に変わったことを知ったM児。また、お店の方の「さびしい」という言葉から、自分もさびしくなると話すなど、インタビューをきっかけに、長沢に対する思いを大きく変容させたM児であったと考えられる。つまり、これまでは建物という表面的な部分でしか校区を見つめていなかったが、2回目の長沢探検を通して、そこに住む地域住民の思いから、校区の未来について考え始めたM児であった捉えることができるのである。

その後、M児は、自分の追究課題を「長沢の困っている人を助けたい!」とし、自分にできることを模索し始めた。

③ 仲間の姿から活動の見通しをもったM児

「長沢の困っている人を助けたい!」と、自分にできることを模索するM児であったが、実際、何から始めていいか分からないで困っていた。そんなとき、11月8日(20/36時)の話し合いで、歴史ある小長沢の道を、これからも大切にしたいと、毎日ゴミを拾っているO児の思いに触れることができ、今後の活動の方向性を見つめることができた。11月8日の話し合い後のノートには、以下のように記載があった(図6)。

私は、自分のできることからやりたいと思っていて、何をすればいいかわからなかったけど、Oさんの話を聞いて、ポスターなどを書くことからでもいいから始めようと思いました※1。古里校区、有名じゃなくてもいい、くらしを楽しみたいんだ!という気持ちが強くなりました※2。

【図6. 11月8日のM児のノート】

長沢に素敵なお店があることをポスターで知らせることで、少しでも校区のにぎやかさを取り戻そうと考えたM児。ゴミ拾いという小さなことをコツコツ続けるO児の姿に刺激を受け、自分も地域のためにできることを、少しずつ実践していこうと意欲を高めたといえる(図6※1)。また、「古里校区、有名じゃなくていい。くらしを楽しみたいんだ(図6※2)」という言葉から、単元の始めに抱いていた「長沢を都会にして有名にしたい」という自分の思いよりも、そこに暮らす地域の方を思いやる気持ちが強くなったM児であったと読み取ることができる。

その後、M児は、ポスターだけでなく、「校区のプラス1活動」として、毎日のあいさつ運動にも積極的に取り組んだ。そこには、あいさつを通して、地域をにぎやかにしたいというM児の切なる思いがあった。

④ M児の学習後の振り返りカードから

単元終了後は、校区のプラス1活動に取り組んできた「自分」のがんばりについて振り返った。評価の観点は、活動に「とても満足している」「少し満足している」「あまり満足していない」「満足していない」の4段階とした。あいさつ運動に取り組んだM児は、「とても満足している」を選び、その理由を次のように記した(図7)。

前までのあいさつは「おはようございます」と言えばいいやと思っていたけど、今では、地域の人が笑顔になるあいさつがいいなと思うようになって、こうやって自分で自分の気持ちに気づくことができ、とてもよかったと思います。これから、このプラス1活動が終わっても、大きな声で相手の顔を見て、地域の人が笑顔になってくれるようなあいさつをしていきたい※1です。

【図7. M児の学習後の振り返りカード】

あいさつは、これまでもしていたが、「地域の人を笑顔にしたい」という明確な目標ができたため、これまで以上に、自分から積極的にあいさつ運動に取り組むようになったM児。振り

返りでも「とても満足している」を選択するなど、M児の活動に対する満足感や充実感を読み取ることができる。

また、「プラス1活動が終わっても大きな声で相手の顔を見て、地域の人が笑顔になってくれるようなあいさつをしていきたい(図7※1)」という言葉から、学校における単元学習は終わっても、“地域を明るく、にぎやかにする”という自分の問題は今後も続けていこうというM児の、地域の未来に対する強い思いを感じることができた。ここに、探究を通して「生き方」を考える総合ならではのM児の育ちがみとれる。M児の追究をまとめると『繰り返し長沢の人・ものと関わることを通して、地域に対する価値観を見つめ直し、自分にできることを続けていこうと意欲を高めたM児』であるとまとめることができる。

(2) A児の追究の考察

① 導入から課題をもつまでのA児

A児は、人目を気にして、自分の思いを伝えることが苦手な児童であったものの学習に対しては、いつも正体している強さをもっている。

道しるべ地蔵や江戸時代の絵地図を見たときも、気付いたことを進んで発表することはなかったが、授業後は、調べてみたい問題を4つ書く(図8)など、学習に対する意欲の高さが伺える。

- | |
|---|
| ① 何時代に古里校区ができ、人が住み始めたのか。 ② 古里校区にはいつ、どんな道ができたのか。 ③ 古里校区に道しるべ地蔵が何個あるのかな。 ④ 古里校区には、太い道と細い道が何本あるのかな。 |
|---|

【図8. A児が考えた学習問題】

図8のように、問題を複数書いたA児であったが、①の校区ができた時代を調べることを通して、②の道ができた時期も分かるのではないかと考え、①の「何時代に古里校区ができ、人が住み始めたのか」を、自分の最初の課題として追究をスタートさせた。

② 住民の思いから実践意欲を高めたA児

A児は、古里校区ができた時代を知りたいと考え、まずは、校区にある古いものを探すことで、その問題を解決しようとした。最初は、インターネットや図書室の資料をもとに調べてい

たが、校区の新町に、古墳や遺跡があることを知り、実際に現地に行って調べたいと考えるようになった。

新町探検には、4人で出かけ、各願寺の歴史や古墳、古里校区の名前の由来など、たくさんのことを近所の方へのインタビューを通して知ることができた。その中で、「新町ってすごいな。古里校区は、歴史あふれる町なんだな」という思いを新たに抱いたA児であった。

一方、近年、大きな新道が新町にできたことで、各願寺の周辺にあった桜並木が切られたことや、近くにあった酒屋さんのお客が激減したことなど、大きな道ができたことによって新たに生じた問題についても、A児は話を聞くことができた。また、インタビューを通して、多くのお年寄りが“昔に戻りたい”という思いをもっていることも知り、どうしたらよいのかと困惑するA児の姿も見られた。

その後、A児は、繰り返し新町探検を行う中で、“昔に戻りたい”という住民の思いに心打たれていく。そして、住民にとってよりよい新町になるようにと考え、長く新町を支える沢村酒店さんの“お客が減少している問題”に対して、何か自分にできることはないかと模索し始めた。

③ 仲間の姿から対象への思いを強めたA児

A児の他にも、A児と同じように、何度も地域の人と関わりながら追究を進めている子どもも少なくなかった。そんな中、教師は、繰り返し対象に関わる子どもたちの思いを問うことで、子ども一人一人が、自分の活動に対する価値を見つめ直すことができるよう、11月8日(20/36時)に、全体で話し合う場を設けた。以下は、その授業の一場面である(図9)。ここでは、A児が進んで挙手し、意見を述べてきている姿があった(図9※1)。

【授業の実際】

【凡例】Co：児童全体としての反応 ()：つぶやき
教：教師 番号：発言番号
教5：Mさんも、Sさんも何度もそのお店に通ったって言ったよね。何で、何度も通ったと思う？
K1：えっと、まず最初に行ったときは、一つとか二つのことを聞きたかったと思うけど、それを、まとめてみて、それについてもっと詳しく調べてみたいなと考えているうちに、それに対してもっと聞きたいことが増えたりして、で、その人たちが、行くたびに、親切にしてくれたり、それから、さほど緊張しなかったりするから何度も通ったんだと思いました。

A1: 私も、SさんとMさんみたいに、まとめてみたら、何回もしゃべりたくなると思うけど、私だったら、何回も通うというのは、お店のことを助けたいから通うと思う。※1
(以下 後略)

【図9. 第20時の授業記録（一部抜粋）】

A児は、普段あまり発言しない物静かな子である。しかし、K児の発言を聞き、何度もお店に通うのは「お店のことを助けたいからだ（図9※1）」と、自ら挙手して、今の気持ちを語り始めた。

では、なぜA児は、ここで自分の思いを進んで発言してきたのであろうか。授業後、A児に「自分の思いをしっかりと伝えることができたね」と声をかけると、次のような言葉が返ってきた（図10）。

筆1: 今日は、沢村酒店さんに対する自分の思いをしっかりと発表することができたね。
A1: 昨日の放課後ね。新町の沢村酒店に行ったの。何か、お手伝いしようと思って。
筆2: お手伝いって?
A2: 前のインタビューで、沢村さんから「お客が減った。昔に戻したい」と言っておられたから協力したいと思ったの。でも、はずかしくて、お店の中には入れなかった。今日の放課後こそは、お手伝いしようと思う。

【図10. 授業後のA児と筆者のやり取り】

昨日の放課後、自主的に沢村酒店を訪れ、自分にできることを見つけようとしたA児。恥ずかしさから、お店の方に話しかけることはできなかったようだが、今日の放課後にはもう一度訪れたいと考え始めていたのである。ここに「地域の人を助けたい」「協力できることを見つけたい」という思いの強さを見取ることができる。この強い気持ちがあったからこそ、授業場面でも、自分の意見をしっかりと述べることであったのではないだろうか。ここに、これまでの活動を本気で続けているからこそ、発言しなくなったA児の内面的な高まりを読み取ることができる。

③ A児の学習後の振り返りカードから

単元終了後、これまで一貫して考えてきた「古里校区に対する今の思い」を、学習前の自分の思いと比較させながら書く時間を設けた。

以下は、A児の振り返りである（図11）。

学習を始める前は、古里校区のことをどこにでもある普通の校区だと思っていたけど、今は、たくさんの伝統や歴史がある世界の一つしかないすてきな大きな校区だと思うようになった。これからは、ゴミ拾いや地域の人のことを手伝ってあげたりして、校区を守りたいと思っている。

【図11. A児の学習後の振り返りカード】

「どこにでもある普通の校区」から「伝統や歴史がある世界の一つしかないすてきな大きな校区」と校区に対する思いを変容させたA児。また、考え方が変わった理由を、今もなお、地域のためにがんばる沢村酒店さんの姿を一番の理由に挙げていることから、地域の方の生き方に心打たれ、自分を見つめ直したA児であるといえる。A児の追究をまとめると『地域に貢献する沢村さんの生き方や地域の歴史に触れる中で、これまで以上に地域への愛着を深めたA児』であると捉えることができる。

(3) 学級全体の子どもの追究の考察

ここまでは、単元学習の中で見られた子どもの変容や育ちを、抽出児であるM児やA児に焦点を当てて検証してきた。ここでは、単元終了後に書いた振り返りカード（①学習を終えて、今、古里校区のことをどう思っていますか。②考え方が変わった一番の理由。③学習を終えて学んだこと、考えたこと）をもとに、全員分の学びや育ちを整理する（資料1）。

資料1から、学習後は、多くの子が学習前と比べ、古里校区に対する思い（振り返り①）を変容させ、それまで漠然ともっていた校区に対する思いをより確かなものになっていることが分かった（34/36人＜約94%＞※児童番号3. 32以外）。

また、思いが変容した一番の理由（振り返り②）に目を向けると、M児やA児のように、今もなお、地域のためにお店を続けている人の生き方を理由に挙げた子ども（児童番号2. 9. 10. 15. 18. 20. 27. 29. 33. 34）、各願寺など地域の歴史的建造物や伝統行事を根拠に挙げた子ども（児童番号4. 11. 14）、そして359線の交通量や道に関する調査活動を通して思いを見つめ直した子ども（児童番号8. 12. 24. 25. 31）など、一人一人の追究対象や追究の仕方が多様であったことが改めて明らかとなった。

さらに、31/36人＜約86%＞（※児童番号3.

19. 30. 32. 36以外) の子どもが、思いが変容した一番の理由(振り返り②)だけでなく、学習を終えて、学んだこと、考えるようになったこと(振り返り③)を自分の追究と関連付けながらしっかり明記することができている。これらのことから、抽出児である、M児やA児だけでなく、多くの子が主体的に対象と関わり、自分の価値観を揺さぶられるような、充実した探究活動になっていたと捉えることができる。

(4) 多様な追究状況の中で行う学級全体における話し合いの考察

古里の道という単元を展開していく中で、授業者は全体による話し合いを活動の節ごとに行った。活動・体験が中核を占める「総合」において、話し合いの場は、仲間の姿から自分自身の取り組みを振り返り、追究そのものを高める学び合いの場として、とても意義があると考え(例えば、考察1(1)③)。

とはいえ、総合においては、共通のテーマはあるものの、問題の持ち方や追究状況に至るまでの子どもたちの学びは実に多種多様に広がっている。このような異質な子どもたちが一同に集まる話し合いは、本当に「学び合い」になるのだろうか。ここでは、学級全体の話し合い(全9回)のうち、一人一人の追究を高めるのに効果があったと考える第20時の話し合いを取り上げ、多様な学びを携える子どもたちが、どのように関わり合い学び合っていくのかについて考察する。

【本時(第20時)の話し合いを設定した理由】

子どもたちは、調査活動を進めるうちに「こんな事実から、今、古里校区に対してこう思っている」と根拠を明らかにしながら自分の思いをもてるようになっていたが、「道によって交通量が極端に違うことが分かってきた。危険な道が多いので気をつけたほうがよい」「新しい道ができて、店がなくなって不便になったと感じているお年寄りがいる。その人たちは、かわいそうだ」というように、どこか地域の問題を見つけても、他人事として、客観的な思いしかもてない子どもが少なくない状況にあった。

そこで、地域の人と関わり、その人の思いや願いに目を向け、そのことを自分の問題として真剣に考えている子どものよさを紹介する話し合いを設定することで、「自分の活動が校区にとってどんな意味があるのだろう」「自分は〇〇な校区を目指したい。自分にも、

何かできることはないかな」というように、一人一人が改めて自分の活動の価値を見直し、実践意欲を高めることが大切ではないかと考え、話し合いの場を設定した(図12)。

① 授業の実際(授業の前半部分を示す)

【授業の実際】 ※授業の前半部分

【凡例】Co:児童全体としての反応 ():つぶやき
教:教師 番号:発言番号

教1:9月9日から「古里の道ー昔と今ー」の学習を一生懸命がんばってきました。そして、いろんなことを調べて、分かったことから、自分は、古里校区についてどう思っているのかをいつも考えながら学習をすすめてきたわけですが、今みんなどんな思いをもっているかね。今日は、まずSさんの思いを聞こうと思います。

S1:私は、1回目の探検のときに昔の長沢は、人がいっぱいいて、お店がたくさんあって、警察や登記署などがあるから、にぎやかな都会な場所だと思いました。けど、2回目の探検のときに、商店の方に、「今の長沢をどう思っていますか?」と聞いたら、お客が減ってすごくさびしいと言っておられました。私も、長沢の道に人があまり通っていないから、すごくさびしいなと思いました。3回目の探検ときに、わたしはすごくがんばってほしいという気持ちになりました。あんまり道に人は通っていないけど、今まで長沢のためにやっていたので、これからもずっとがんばってほしいという気持ちになりました。※1

教2:Sさんは、探検を通して、お店の人にはがんばってほしいという気持ちをもっている。Sさんの気持ち、分かりましたか?それを聞いて、今、どう思っていますか?

A1:ぼくも、2回目の探検で、Sさんたちと長沢の店に行くと、豊店の方にインタビューして、昔はにぎやかで、速星は昔ダメだった。でも、今の速星はあんなににぎやかだから、長沢もがんばれば昔みたいになれるからがんばってほしい。

(中略)

Y1:えっと、私は、長沢のことじゃないないんだけど、新町の一軒しかない、お店について調べていて、そのお店について調べる前は、あまり何も思わなかったけど、なんか調べてみて、不思議な事がたくさんあって、それで、Sさんの話を聞いて、私もSさんと同じように、そのお店を続けることにがんばってほしいと思いました。※2

M1:私も長沢のことについて調べていて、何回も同じ方たちにもお話を聞いていて、迷惑じゃないかなと思うときもあったけど、すごく親しくしてくださっていて、で、やっぱり人通りも減ってきているし、なんか品物の数とかも減ったというお店もあったけど、地域のためにがんばっておられるから、まだお店を続けてほしいなという思いもあるし、自分もできることをがんばりたいと思う。

【図12. 第20時の前半部分】

この授業は、「古里校区について、今、どう思っているか」という単元を一貫して考えてきているテーマについての話し合いである。まず授業者は、S児の思いを意図的に取り上げ、第一発言者として指名するところからスタートし

た(教1)。

S児は、最初は、登記署や警察署が昔あったことから校区のことをすぐく都会と捉えていたが、今の長沢の交通量が減ったことや、それに伴ってお店の客も減ったことを知る中で、校区に対する見方を少しずつ変えていっていることが分かる(S1)。そして、「お客が減ってさびしい」というお店の人の思いに触れる中で、「これからもがんばってほしい」とお店の方を励まし、応援する気持ちを高めたS児であったといえる(S1)。その後、お店のがんばりに目を向けるS児の思いを共感的に受け止めるA児やY児などの発言が続いた(A1.Y1)。特にY児は、S児とは、追究状況も校区に対する思いも異なっていたが、S児のお店の人に対する思いを聞く中で、自分の校区に対する思いを新たに見つめ直し始めていることが読み取れる(図12※2)。

その後、M児は、それまでの話し合いをまとめるように、自分の思いを述べてきた(M1)。M児の発言に目を向けると、これからの長沢を考えると、S児やA児、Y児が述べたように「お店の人ががんばること」はもちろんのこと「自分たちががんばること」も、もう一方で大切にしなければならないと主張したかったM児ではないだろうか。つまり、前の3人の意見をしっかり聞いていたからこそ、ここまでの発言を整理し、自分の意見を述べることでできたM児であるといえる。

以上が授業の前半部分であったが、児童の発言に目を向けると、全ての児童が授業者が最初に指名したS児の思いと関わりながら、自分の思いを語っていることが分かる。子どもの中には、Y児のように、S児と違う町内の問題を取り上げ活動してきているにもかかわらず、S児の発言から自分の校区に対する思いを見直している子どもも見られた。これらのことから、第一発言者の思いをしっかり受け止め、仲間の思いを共感的に聞こうとする構えが育ってきている子どもたちであることを見て取ることができる。

② 授業の実際(授業の中盤部分から)

M児の発言後、授業者は、「何回も、そのお

店に通った(図13※1)」という言葉に着目し、その言葉の背景にあるM児やS児の思いを、全体に考えさせた(教5)。

以下は、その後の授業記録である(図13)。

【授業の実際】 ※授業の中盤部分
 教5：Mさんも、Sさんも何度もそのお店に通った※1って言ったよね。分かったかい？何で、何度も通ったと思うの？
 K1：えっと、まず最初に行ったときは、一つとか二つのことを聞きたかったと思うけど、それを、まとめてみて、それについてももっと詳しく調べてみたいと考えているうちに、それに対してもっと聞きたいことが増えたりして、で、その人たちが、行くたびに、親切にしてくれたり、それから、さほど緊張しなかったりするから何度も通った※2んだと思いました。
 A1：私も、SさんとMさんみたいに、まとめてみたら、何回もしゃべりたくなると思うけど、私だったら、何回も通うというのは、お店のことを助けたいから通うと思う。※3
 教6：ここには、がんばっている、助けたいという気持ちがあるんじゃないの、だから、何度も通っているんじゃないかなと。どうだい？それを聞いて。
 ※ 少し間ができる。ずっと静かに待つ教師・・・
 K2：Aさんが言ったことで、(中略)私も悲しくなったりして…。※4 だけど若いお客さんが減ったけど、地域のためには、まだお客さんも来るから、やめたりしたら、その通っているお客さんが、また悲しんだりとか、なんか、そのお客さんが悲しまれると思うから、そのお店の人は、続けたいという気持ちがあるから、その気持ちがあつて助けたいという気持ちがあつたのだと思う。

【図13. 第20時の中盤部分】

授業者の投げかけ(教5)に対し、まずK児が「もっと聞きたいことが増えた…行くたびに親切にしてくれたから」と自分の考えを述べてきた(図13※2)。もともとK児は、よく発言する活発な子どもでもあり、今回も、授業者の問いに対し、K児なりに自分の経験を想起しながら意見を述べてきたと考えられる。

しかしその後、このK児の発言に対して、「私だったら、何回も通うというのは、お店のことを助けたいから通うと思う」と、別の視点を全体にA児が投げかけてきている(図13※3)。A児は、K児の発言を聞く中で、何度もお店に通うのは、分からないことを聞きに行くという単純なことではなく、「お店のことを助けたいからだ」と自ら挙手して発言したくなるほど、A児の中に活動を通して、お店の方の思いに寄り添う内面的な高まりがあつたと考えられる。

その後、しばらく沈黙が続いたが、A児に物申されたK児が再び挙手して発言してくる。

(K2)。下線部からもわかるように、K児は、A児の発言を聞く中で、直前に自分が発言した考えを見つめ直し、「私もA児と同じように、お店の人を助けてあげたいという気持ちがある」ということを学級の仲間に分かってほしいと願うようになり、続けて発言したのではないだろうか(図13※4)。

このように考えると、自分とは異なるA児の思いを共感的に受け止め、自分の思いを見つめ直したという点において、異質な子どもたちが集まる学級の中で、関わり合い高め合う姿が見られたと解釈できる。

③ 授業の実際(授業の終末部分から)

授業の終末では、M児が「地域のために何かをしたいと思っているが、分からない」という、自分の悩みを述べてきた(M2)。そこで、教師は、すでに地域のために活動を行っているO児を取り上げることで、仲間の姿から自分の取り組みを振り返らせようと考えた。

以下は、終末部分の授業記録である(図14)。

| |
|--|
| <p>【授業の実際】 ※授業の終末部分</p> <p>M2: <u>がんばっている人のことも見習って、何かをしたいと思っているけど、今何をしたらいいか分からなくて、今自分にできることを悩んでいます※1。</u></p> <p>教13: <u>自分にできることってなんだろうね。どんなことなんだろうね。実は、もう始めている人がいます。</u></p> <p>Co: (お互いに顔を見合う子どもたち)</p> <p>O1: 挙手</p> <p>O2: えっと、私は今がんばっていることは、ごみ拾いです。登校とかに、6年生さんとかに手伝ってもらってやっている。私が調べた小長沢の道路は、お殿様が来たみたいで、それで、お殿様は、小長沢の景色を気に入っていたんだけど、お殿様が歩いた道というところが、今になってきたなくなってしまって、そのまま忘れてしまうのは、嫌だったから、きれいにして、がんばっているところを、みんなに見てもらったら、「わたしも道路をきれいにしたいな」と周りの人が思ってくれたらうれしい。</p> <p>教14: Oさんの今の話を聞いて、どうだい?</p> <p>G1: <u>これは、自分にできることだし、大きな力もいらなから、自分の町をよくしようとがんばっているのでもいいと思いました※2。</u></p> <p>R2: <u>ごみ拾い以外にも、自分でできることを探して、自分もやってみたいと思いました。</u></p> |
|--|

【図14. 第20時の終末部分】

「何かをしたいと思っているけど、今何をしたらいいか分からない(図14※1)」というM児の悲痛な思いは、追究状況や目指す地域が異なっているにもかかわらず、多くの子どもが共通に抱く悩み

であると考えられる。その意味において、授業者は、自分にできることを見つけ、すでに取り組んでいるO児を意図的に取り上げることで、一人一人の子どもたちに各々の活動の見通しをもたせようとしたのである。

また、O児の取り組みのよさは、誰にでもできる活動であること、目指す地域を意識して活動していることの2点が考えられる。実際、G1発言を見ると、G児自身も、O児のよさをしっかり認識していることが読み取れる(図14※2)。このことから、子ども自身が、仲間の取り組みのよさを感じることができており、改めて子どもの聞く構えの育ちを、この場面から感じとることができたと考えられる。

最後に、授業では発言しなかったが、G児やR児のように、仲間の姿を契機に、自分の追究を見つめ直した子どもについて紹介する。

以下は、授業後の子どもたちのノートの抜粋である(図15)。

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 私は、MさんやOさんの意見を聞いて、Mさんは、自分にできることがないかと考えていることがすごいなあと思った。(中略)私も、お店を続けておられる長沢のみなさんの役に立てたらいいなあと思った※1。(Z児) ほくが思っていることは、Oさんはすごいということです。理由は、ほくが4年生の時、公園のゴミ拾いをしようとしたけど、5日間しかできなかったけど、Oさんはずっと続けているし、登校のときだけでなく、下校のときも拾っているのすごい※2と思いました。(W児) 私は、Oさんがやっているゴミ拾いは、すごく良いことだと思うし、そういうことをしようと思ったOさんもすごいと思いました。ただ、やるのではなく、そのおとのおさまが気に入った道・景色を忘れてほしくない!という思いをこめてやっているということに感動※2しました。私も地域のために、何かしたいと思いました。これからも、この古里校区のすてきな歴史を守りたいと心から思いました。(H児) |
|--|

【図15. 授業後の子どもたちのノート】

Z児のノートを見ると、これまでは、地域に対する具体的な活動にまでは目が向いていなかったが、何か地域のためにできることがないかと悩むM児の姿に触れることで、自分も役に立ちたいと実践意欲を高めていることが読み取れる(図15※1)。また、W児やH児は、「ゴミを拾う」というO児の行動そのものよりも、毎日継続的に取り組んでいることや、願いをもって活動していることなど、O児の取り組みのよさに

目が向いていることが分かる(図15※2)。

ここにも、仲間の姿を共感的に受け止め、自分の追究に生かそうとする子どもの姿を見て取ることができる。

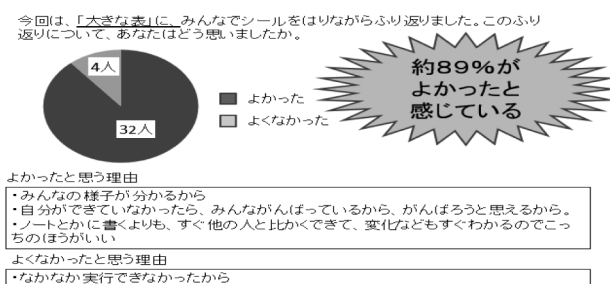
2 1年間を通しての子どもの変容から

ここまでは、「古里の道—昔と今—」という単元学習を通して見られた子どもの変容から、個々の探究を重視する総合が、どのような子どもの育ちにつながるかを検証してきた。ここからは、総合を中心に、年間を通して取り組んだ自己評価が、子どものどのような育ちにつながったのかを3月に実施したアンケート調査から検証する。

さらに、総合の学習を始める直前の6月と学習を終了した3月に2度行った「学級集団アセスメント(QU)」の結果の変化とも関連付けながら分析し、学級経営における総合の価値について考察する。

示した「大きな表」にみんなでシールを張って振り返ったことについてどう思うかを子どもたちに尋ねた結果である。集計すると、32/36人(約89%)の子どもたちが今回の「大きな表」での振り返りがよかったと感じていることが分かった。その理由としては、「みんなの様子が分かるから」「自分ができていないとき、みんなのがんばりをみると自分もがんばろうと思えるから」などが挙げられた。

アンケート①



【図17. アンケート①の結果】

(1) 自己評価アンケートから見る子どもの育ち

尾島級では、「生き方を考える」という総合の目標を達成させるために、年間を通して「自己評価」を指導の重点として学習に取り組んできた。中でも、一人一人の主観的な自己評価を大きな表にして示し(図16)、互いに見合ったり、気付いたことを話し合ったりする中で、仲間の姿から自分の自己評価の仕方そのものを見つめ直す活動は、本論文で紹介した「古里の道(全36時間)」だけではなく、1学期に行った「古里校区のじまんの人(全15時間)」でも行ってきた(図2. 自己評価の②参照)。

| 出席番号 | 11月9日 | 11月16日 | 11月25日 | 12月2日 | 12月9日 |
|------|-------|--------|--------|-------|-------|
| 1 | ○ | ◎ | ○ | ○ | ◎ |
| 2 | ● | ○ | ○ | ◎ | ◎ |
| 3 | ○ | ○ | ○ | ● | ◎ |
| 4 | ○ | ● | ● | ○ | ◎ |
| 5 | ● | ◎ | ○ | ◎ | ◎ |
| 6 | 休 | 休 | 休 | ○ | ○ |
| 7 | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ |
| 8 | ● | ○ | ● | ◎ | ◎ |
| 9 | ◎ | ◎ | ● | ◎ | ◎ |
| 10 | ◎ | ◎ | ● | ◎ | ◎ |

【図16. 自己評価の一覧表】

【凡例】◎：プラス1活動ができたと思う ●：できなかったと思う ○：分からない

そこで、1年間を通して取り組んだ自己評価が、子どもたちのどのような育ちにつながったのかを具体的に検証するために、すべての実践が終了した3月にアンケート調査を実施した。

図17は、個人のノートではなく、学級に掲

自己評価は、個人のノートやプリントに書いてそのままになることも多い。しかし、「みんなのがんばりを見ると、自分もがんばろうと思える」という言葉にもあるように、表に示された友達の自己評価を互いに見合うことを通した話し合いを設定することで、プラス1活動という共通の目標に向かって、みんなで取り組んでいることを実感でき、改めて活動に対する意欲を高めた子どもが少なくなかったのではないだろうか。

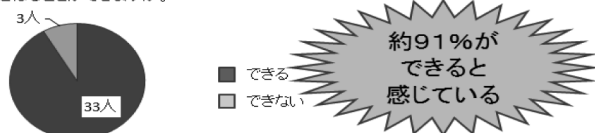
また、「大きな表」での振り返りがよくなかったと思う理由としては、「なかなか活動が実行できなかったから」という理由が少数であったが挙げられた。今回は、大きな表にすることで、敢えて、個人の振り返りを人前にさらすことを強制したため、活動ができなかった子にとっては、できない自分を仲間の前にさらけ出すことになり、少なからず抵抗が生まれたのではないかと考えられる。

図18は、「大きな表」を使って振り返りをした場合、クラスで自分だけが違う色になる場合もある。もし、あなた自身、十分に活動ができなくて、青(活動ができなかったと思う)か黄(分からない)のシールを張りたいたいと思ったとき、他の人が全員赤シール(活動ができた)

思う)でも、あなたは、青か黄のシールを張ることができるか”を子どもに尋ねた結果である。

アンケート②

今回のような「表」を使ったふり返りした場合、クラスで自分だけがちがう色になる場合もあります。もし、あなた自身、十分に活動ができなくて、青か黄のシールをはりたいたいと思ったとき、他の人が全員赤シールでも、あなたは青か黄のシールを、きちんとはることができるでしょうか。



できると思う理由

- ・自分のやったことだから。自分のやったことは堂々とほれます。
- ・しっかりと理由をもって、その青か黄をはっているから。
- ・みんなと一緒にじゃやだと言う人は、みんなに頼ってばかりいる人、ちゃんとできる人はかっこいい。

できないと思う理由

- ・はずかしいし、何か言われるかもしれないから。

【図18. アンケート②の結果】

集計すると、33/36人(約91%)の子どもたちがきちんと張ることができると思っていることが分かった。その理由としては、「自分のやったことだから、自分のやったことは堂々とほれる」「自分はしっかりと理由をもって青か黄をはっているから」という理由が挙げられた。

このように、多くの子どもたちは、たとえば、自分だけが活動できなかった場合も、堂々とみんなの前で意思表示できるという、強い気持ちをもっていることが分かった。さらに、子どもたちが、いつごろから、自分一人が他の人と違っていてもきちんと意思表示できるようになったと感じているのかを聞いてみた(図19)。

いつごろから、自分の思いをきちんと意思表示できるようになりましたか？

- ・5年生になる前から…4人<約11%>
- ・5年生の1学期前半ごろから…11人<約31%>

※大きな表(自己評価一覧表)を使って初めての学習(特別活動「学校のためのプラス1活動」)に取り組んだころ

- ・5年生の1学期後半ごろから…10人<約28%>

※大きな表(自己評価一覧表)を使った2回目の学習(総合「古里校区的じまんの人」)に取り組んだころ

- ・5年生の2学期ごろから…10人<約28%>

※大きな表(自己評価一覧表)を使った3回目の学習(総合「古里の道一昔と今一」)に取り組んだころ

- ・5年生の3学期ごろから…1人<約3%>

【図19. アンケート②の結果】

図19からも分かるように、5年生の最初の段階では、きちんと意思表示できると感じている子どもは、わずか12%であった。その後、総合や特別活動の授業において、大きな表(自己

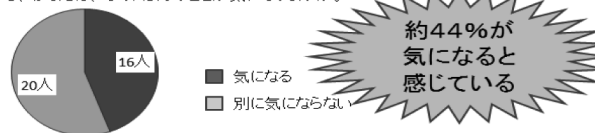
評価一覧表)を使った学習を繰り返していく中で、その割合は増えていき、2学期終了時には全体の約9割の子が自信をもって、自分の思いを伝えることができると回答していることが分かった。

確かに、子どもたち自身が、自己評価一覧表をもとにした話し合いを行い、自己を振り返るという学び方に慣れてくることで、少しずつではあるが、きちんと意思表示できる子どもは増えていくだろう。しかし、その背景には、自分で決めた問題を自分なりの方法で長い時間一生懸命取り組んできた子ども自身のがんばりがあるからこそ、自分の言動に対して自信をもったり、きちんと責任をもとうとしたりする子どもの動きの高まりにつながったのではないだろうか。

図20は“逆に、もしクラスで一人だけ、青か黄のシールを張っているAさんがいたら、あなたは、そのAさんのことが気になるか”を子どもたちに尋ねた結果である。

アンケート③

②とは逆に、もしクラスで一人だけ、青か黄のシールをはっているAさんがいたら、あなたは、そのAさんのことが気になるか。



気になると思う理由

- ・なんでできなかったのか一人の友達として気になる。
- ・Aさんは、活動に満足したのかな?してないのかな?
- ・どうしてできなかったんだろう?ちゃんとしたわけがあるんだね。できないのは、仕方ないよね。でも、心配。

別に気にならないと思う理由

- ・別に悪いことではない。
- ・別にその人ががんばったのだから、よいのではないかと思うから。
- ・みんな同じ活動をしているわけじゃないから、出来てない人だと思う。

【図20. アンケート③の結果】

集計すると、16/36人(約44%)の子どもたちが「気になる」と感じていることが分かった。気になる理由としては、「なぜ、できなかったのか一人の友達として気になる」「どうしてできなかったのだろう…心配」など、同じテーマに取り組んでいる仲間として、相手を配慮する気持ちが、そこから読み取ることができた。

一方で、20/36人(約56%)の子どもたちが「気にならない」と感じていることが分かった。気にならない理由としては、「別に悪いことではない」「みんな同じ活動をしているわけ

じゃないから、出来てない人だと思う」などの理由が挙げられた。これは、取り組んでいる活動も一人一人異なるため、できない人がいるのは当然のことであり、決して悪いことではないという仲間への励ましの気持ちとも読み取ることができるのではないだろうか。このように考えると、アンケート③は「気になる」「気にならない」と答え方は違ってても、仲間を配慮するという点においては、共通する部分があると考えられる。

最後に、アンケート④⑤の考察である。図21は、「友達の振り返りを見て、「気になったことを話し合う授業（例えば、がんばっているBさんが、なぜ赤ではなく、黄の「分からない」にしているのか）では、自分のことでなくても、真剣に話を聞くことができたか」を子どもたちに尋ねた結果である（図21）。

アンケート④

友達の振り返りを見て、気になったことを話し合う授業（例えば、がんばっているBさんが、なぜ赤ではなく、黄の「分からない」にしているのか）では、自分のことでなくても、真剣に友達の話聞くことができましたか。



【図21. アンケート④の結果】

集計すると、33/36人（約92%）の子どもたちが真剣に話を聞くことができたと感じており、さらに28/36人（約78%）の子が、友達の振り返りから、自分の取り組みについて考えることがあったと答えている（図22）。

アンケート⑤

④の授業が終わった後、友達の振り返りから、自分の取り組みについて考えることがありましたか。



どんなことを考えたのか。

・その人は、自分に厳しいな。(ぼくは、ちょっとでもしたら赤をはっていた。
 ・ぼくは、少しのことでも赤シールをはっていた。考えていたことは、友達がすぐぐんばっているのに、ぼく自身は甘やかして赤シールをはってしまうことがあった。
 ・ぼくの活動は、本当にプラス1になっていたのかな？ 毎日適当にやっていた気が...

なかったと思う理由

・ぼくは、ぼくだから、人のことは気にせずに、くわしく調べたから。
 ・自分がそれでいいと思っているから、その取り組みを真剣にすべしと思ったから。
 ・基準は人それぞれだと思ったから。

【図22. アンケート⑤の結果】

友達の振り返りから考えた内容としては、「ぼくは、ぼく自身を甘やかして赤シールをはっ

てしまったことがあった」「ぼくの活動は、本当にプラス1活動になっていたのかな。毎日適当にやっていた気が…」などというように、子どもたちは自分の自己評価の仕方や活動の仕方そのものを見つめ直していたといえる。

一方で、考えることがなかった、つまり、今の自分の取り組みを変える必要がないと感じた子は、「ぼくは、ぼくだから…」「基準は人それぞれだから」という言葉からも分かるように、Aさんのことを理解しつつも、自分は「今のままでよい」と、改めて自分の活動に対する思いを確かなものにしたといえるのではないだろうか。

以上、年間を通して、一人一人の主観的な自己評価を大きな表に示し、互いに見合ったり、気付いたことを話し合ったりする中で、次のような子どもの育ちがあったと考えることができる（図23）。

- 自己評価を大きな表に示し、掲示することで、みんなが共通の目標に向かって取り組んでいることを実感でき、課題に対する意欲の高まりにつながった。（アンケート①から）
- 自分の言動に対して、きちんと責任をもてるようになった。（アンケート②から）
- 仲間の自己評価に対する思いを聞く中で、自分の自己評価の仕方や活動そのものを見つめ直すことができ、探究の前進につながった。（アンケート④⑤から）

【図23. 自己評価を通して見られた子どもの育ち】

(2) 学級集団アセスメント (QU) の変容から見る子どもの育ち

次は、学級集団アセスメント (QU) の結果の変容から尾島級の1年間の育ちについて考察してみる。QUとは、河村 (2012)⁽⁸⁾ が考案した質問紙調査のことであり、学級集団内における児童生徒の心理面をこと細かく明らかにできることから、ごく一般には多くの学校教員が生徒指導に役立てるために用いている。具体的には、「いごちのよいクラスにするためのアンケート」「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」「ふだん (日常) の行動を振り返るアンケート」の3つから構成されており、それぞれ4段階 (とてもそう思う、少しそう思う、あまりそう思わない、まったくそう思わない) で振り返る形式となっている。

なお、ここでは変化が顕著に見られた4つの質問項目に注目し、考察してみる。

図24は、“クラスの人を声をかけたり、親切にしてくれたりするか”を子どもに尋ねた結果である。すると、“とてもそう思う”と答えた子が6月に比べ、3月は、約11%増えていることが分かった(図24.※1)。また、“あまりそう思わない”“全くそう思わない”の否定的な回答に注目すると、その合計が13.9%から5.6%に減っていることが分かる(図24.※2)。これらのことから、大部分の子が、仲間からの積極的なかかわり・配慮を感じるようになってきていることが読み取れる。

| 1.クラスの人を声をかけたり親切にしてくれたりするか | | | | |
|----------------------------|-------|--|-------|-------|
| | 6月 | | 3月 | ※1 全国 |
| とてもそう思う | 55.6% | | 66.7% | 39.8% |
| 少しそう思う | 30.6% | | 27.8% | 43.9% |
| あまりそう思わない | 11.1% | | 2.8% | 13.4% |
| まったくそう思わない | 2.8% | | 2.8% | 2.9% |

【図24. QUの結果①】

図25は、“クラスには、いい人だな。すごいなと思う友達がいるか”を子どもに尋ねた結果である。図25から、6月の時点で、“とてもそう思う”と答えていた子が88.9%と、全国平均と比べてもかなり高い数値を表していたが、3月の時点ではさらに増え、94.4%を示した(図25.※1)。これらの変容からは、年間を通して、仲間のよさを認める学級風土が一層築かれていったことが読み取れる。

| 2.クラスには、いい人だな。すごいなと思う友達がいる。 ※1 | | | | |
|--------------------------------|-------|--|-------|-------|
| | 6月 | | 3月 | 全国 |
| とてもそう思う | 88.9% | | 94.4% | 68.2% |
| 少しそう思う | 8.3% | | 2.8% | 22.8% |
| あまりそう思わない | 0.0% | | 0.0% | 6.7% |
| まったくそう思わない | 2.8% | | 2.8% | 2.3% |

【図25. QUの結果②】

図26は、“運動や勉強等でクラスの人から認められることがありますか”を子どもに尋ねた結果である。図26から、仲間のよさを認める子どもが多い反面、自分自身は“まったく認められていない”と感じている子が、6月の段階で22.2%にも上っていたこと、そして3月には、それが5.6%と激減していることが分かった(図26.※1)。これらの変容からは、クラス

内においてあまり認められていなかった子どもたち、自己肯定感の低かった子どもたちが、自分自身への自信を高めている姿を読み取ることができる。

| 1.運動や勉強等でクラスの人から認められることがある。 | | | | |
|-----------------------------|-------|--|-------|-------|
| | 6月 | | 3月 | 全国 |
| とてもよくある | 16.7% | | 19.4% | 15.2% |
| 少しある | 52.8% | | 55.6% | 42.0% |
| あまりない | 8.3% | | 19.4% | 30.6% |
| まったくない | 22.2% | | 5.6% | 12.2% |

※1

【図26. QUの結果③】

図27は、“班活動で友達が失敗したときは許していますか”を子どもに尋ねた結果である。図27から、6月に比べると“いつもしている”と答えた子が、8.3%増えたり(図27.※1)、“ほとんどしていない”と答えた子が0.0%になったり(図27.※2)と、失敗した仲間に対する配慮の姿勢が、全体的に高まっていることが読み取れる。

| 5.班活動で友達が失敗したときは許している。 ※1 | | | | |
|---------------------------|-------|--|-------|-------|
| | 6月 | | 3月 | 全国 |
| いつもしている | 75.0% | | 83.3% | 61.4% |
| ときどきしている | 22.2% | | 13.9% | 31.4% |
| あまりしていない | 0.0% | | 2.8% | 4.8% |
| ほとんどしていない | 2.8% | | 0.0% | 2.4% |

※2

【図27. QUの結果④】

VI 考察

Vの結果の検証から、総合の単元学習を通して、活動を繰り返す中で、多くの子どもが仲間の姿を契機に、自分の追究を見直す姿が見られたこと、また、自分と関係がなくても友達の話真剣に聞くことができたと感じている子が、学級の9割以上に上ったことなど、主に「聞く構え」において、子どもの育ちを見ることができた。また、QUの結果においても、仲間のよさを認め合う雰囲気が、学級内にあると感じている子どもの数が6月と比べ、3月は増えており、それに伴って自己肯定感があまり高くなかった子が自分への自信を高めていることが分かった。

これらを受けて、VIの考察では、一人一人が多様な学びを携える総合の学習において、また、追究対

象も追究状況も異なる集団の中において、なぜ「学び合い」や認め合いを成立させることができたのか、その要因について今一度検証してみる。そして、改めて、学級経営における総合の価値について考察する。なお、「学び合い」には様々な解釈があるが、ここでは、松本(2002)⁽⁹⁾が述べる「自分に直接関わるかどうかにかかわらず、自分にとって意味のあるものとして他を受け止め、自己の質的な変化を促す契機となりうるもの」として用いる。

1 多様な学びを携えている子どもたちが、なぜ学び合いを成立させることができたか

(1) どんな事実を「学び合い」の成立と見なしたのか

筆者らは、Vの結果の検証1(4)で取り上げ

| |
|--|
| <p>【授業の実際】 ※授業の前半部分 【凡例】 Co：児童全体としての反応 ()：つぶやき 教：教師 番号：発言番号 教1：9月9日から「古里の道―昔と今―」の学習を一生懸命がんばってきました。そして、いろんなことを調べて、分かったことから、自分は、古里校区についてどう思っているのかをいつも考えながら学習をすすめてきたわけですが、今みんなどんな思いをもっているかね。※1今日はね、まずSさんの思いを聞こうと思います。 S1：私は、1回目の探検のときに昔の長沢は、人がいっぱいいて、お店がたくさんあって、警察や登記署などがあるから、にぎやかな都会な場所だと思いました。けど、2回目の探検のときに、商店の方に、「今の長沢をどう思っていますか？」と聞いたら、お客が減ってすごくさびしいと言っておられました。私も、長沢の道に人があまり通っていないから、すごくさびしいなと思いました。3回目の探検のときに、わたしはすごくがんばってほしいという気持ちになりました。あんまり道に人は通っていないけど、今まで長沢のためにやっていたので、これからもずっとがんばってほしいという気持ちになりました。※2 教2：Sさんは、探検を通して、お店の人にはがんばってほしいという気持ちをもっている。Sさんの気持ち、分かったかい？それを聞いて、どうだい？※3 A1：ぼくも、2回目の探検で、Sさんたちと長沢の店に行って、畳店の方にインタビューして、昔はにぎやかで、速星は昔ダメだった。でも、今の速星はあんなににぎやかだから、長沢もがんばれば昔みたいになれるからがんばってほしい。※4 (中略) Y1：えっと、私は、長沢のことじゃないないんだけど、新町の一軒しかない、お店について調べていて、そのお店について調べる前は、あまり何も思わなかったけど、なんか調べてみて、不思議な事がたくさんあって、それで、Sさんの話を聞いて、私もSさんと同じように、そのお店を続けることにがんばってほしいと思いました。※5 M1：私も、Sさんと同じように長沢のことについて調べていて…。</p> |
|--|

【図28. 第20時の前半部分】

た20/35時の話し合いの中に、まさに子ども同士が「学び合う」姿があったと捉えた。以下に、実際の授業の様子について示す(図28)。

本時は、子どもたちが単元を通して考えてきた「今の古里校区に対する思い」についての話し合いである(図28.※1)。授業は、S児が第一発言者となり、「お客が減ってさびしい」というお店の人の思いに触れる中で、校区に対する見方を変えた今の自分の気持ちを語る場所からスタートした。(図28.※2)。その後、S児の発言を受けて、A児やY児、M児が進んで発言するわけだが、その発言内容に着目すると、全ての児童が最初に発言したS児のお店の人に対する思いと関わりながら、自分の思いを語っていることが分かる(図28.※4~※5)。特にY児は、S児とは、追究状況も校区に対する思いも異なっていたが、S児のお店の人に対する思いを聞く中で、自分の校区に対する思いを「不思議」から「がんばってほしい」に新しく見直していることが読み取れる(図28.※5)。

このように、筆者らは、仲間の思いをしっかりと受け止め、共感的に理解することを前提として、さらに、自分の考えや思いを見直している20/35時の子どもたちの様子を「学び合い」が成立している事実として捉えた。

(2) これまでの子どもの追究状況との関連(学び合いを成立させた要因①)

次に、VI考察1(1)で述べた「学び合い」が成立した要因を子どもの追究状況とつなげて考えてみる。ここでは、S児の発言を聞いて、自分から進んで発言してきたY児やA児を中心に考察する。

Y児は、S児とは異なり、校区にある由緒あるお寺や古墳など、歴史的建造物の調査を通して校区を見つめ直してきた。20/35時の話し合い直前のノートに着目すると、「もっともっと調べたい」「少しずつ、よりよい古里校区になっていると思う」と記すなど、自分の問題に意欲的に取り組み、よりよい校区を目指して充実した探究を進めていることが読み取れる。

また、A児の追究状況に目を向けると、A児は、昔と今の長沢の町並みの比較調査を通して、校区を見つめ直してきていた。長沢探検後は、

「昔のように、もっと多くの方が長沢に住んでほしい」「速星に負けないような有名な町にしたい」と、隣町との比較から古里校区に対する願いや思いを高めていた。さらに、20/35時の話し合い直前、A児は、ノートに次のように記している(図29)。

ぼくは、この古里校区をやっばり有名にしたいです。(中略)この前、ますいさんに話を聞いて、なぜ速星が有名になったのかは分かったけど、ぼくはあんな大きな建物(ファボーレ)を建てなくて、有名にしたいと思います。やれば、絶対にできると思っているので、そうしたいと思います。※1

【図29. 話し合い直前のA児のノート】

近年有名になった速星地区のように、自分の校区も有名にしたいと願って活動を進めてきたA児。やれば絶対にできる(図29 ※1)という言葉からも分かるように、Y児と同様、本気で自分の問題に向き合い、充実した追究活動を進めているA児の姿が読み取れる。

このように、Y児やA児は、S児とは追究対象や追究状況も異なるものの、「今の古里校区をよりよくしたい」という願いをもって、本気で活動している点は共通していたといえる。これらのことを踏まえ、筆者は、次の2点が多様な活動をしてきている子ども同士が、学び合いを成立させる要因であると考えた(図30)。

- (1) 自分で決めた問題に対して、一人一人が本気の追究を行っていること
- (2) 自分と同じテーマに向かって、本気で追究し、多様な学びを携えている仲間が存在すること

【図30. 筆者らが考える学び合いを成立させる要因①】

(3) 教師の授業における働きかけとの関連(学び合いを成立させた要因②)

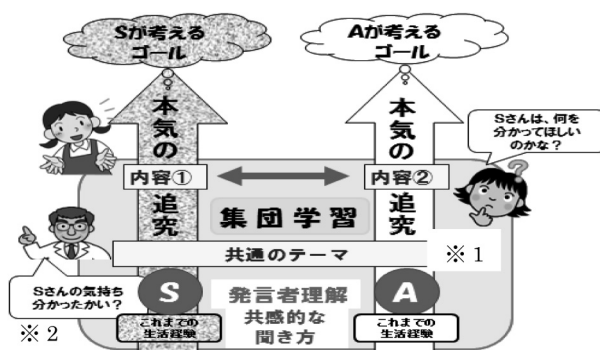
次に、学び合いを成立させる要因を、20/35時における教師の働きかけから考えてみる。

前述でも述べたように、20/35時の話し合いのテーマは、「今、古里校区についてどう思っているか」であり、これは全員が単元を一貫して考えてきている共通テーマであったといえる。子どもたちは、活動の節ごとに、「今」の古里校区に対する思いを自由記述で自己評価しており、調べた事実から、その都度校区に対する思いを積み重ね、深めてきていた。その意味において、本時は、全員が追究の土台としているテ

マであったため、仲間の考え方が思わず気になるような状況が生まれやすい時間であったと考えられる。ここに、「学び合い」を成立させた要因の一つがあったと考える。

また、第一発言者のS児が話し終えた後、教師は「Sさんの気持ち分かったかい?それを聞いてどうだい?」と、S児の内面を子ども全体に問い返している(図28. ※3)。この発問は、「S児が何を言ったか」という発言内容を子どもに問う発問ではなく、まずは「何を分かってほしくて発言したS児なのか」と仲間のことを丸ごと理解させようとする教師の姿勢があったといえる。筆者らは、ここにも、共感的な「学び合い」を成立させるポイントがあったと考え、これを「発言者理解」を促す教師の支援と捉える。

以上の考えに立ち、以下に、学び合いを成立させた話し合いのイメージを図で整理する(図31)。



【図31. 学び合いを成立させた集団学習のイメージ(総合)】

図30でも述べたように、学び合いを成立させるためには、まずは、それまでの本気の追究を一人一人が携えていることが欠かせない。

次に、問題の持ち方や解決の方法、納得の取り付け方(学習のゴール)まで子どもに委ねる総合の学習においては、子どもの学びも多種多様に広がるため、共通のテーマが、一人一人をつなぐ大きな要因となっている(図31. ※1)。また、今回見られた「発言者の理解」を促す発問も、話し手と聞き手の心を共感的につなぎ、仲間の姿から、これまでの自分を見直す「学び合い」の要因になっていたと考えられる(図31. ※2)。

これらを踏まえ、筆者らは、次の2点を学び合いを成立させる教師の働きかけであると捉

えた (図32)。

- | |
|--|
| (1) 単元を通して一貫したテーマについて話し合うこと (2) 話し合いにおいては、発言内容だけではなく、発言者(人)そのものを理解させること |
|--|

【図32. 筆者らが考える学び合いを成立させる要因②】

ここまでは、本論でも、たびたび取り上げてきた総合の実践(古里の道 20/35時)を中心に「学び合い」を成立させるための要因について整理してきたわけだが、これらは教科の学習においてはどうか。

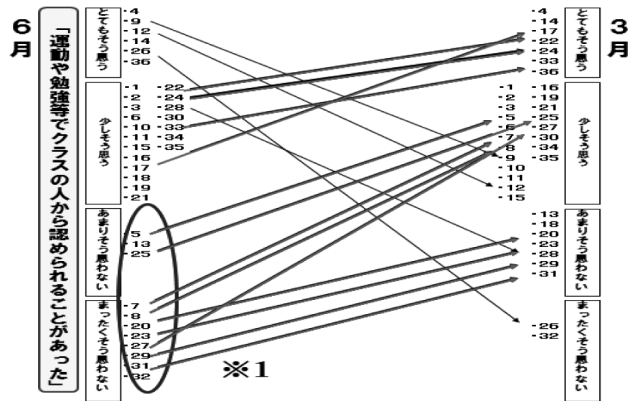
明確な到達目標や時間的な制約がある教科の学習においては、発言者理解というよりも発言内容のみを重視した「話し合い」になることも少なくない。筆者らも、過去に「友達の発表する内容をよく聞き、自分の考えとつなげて発表しよう」と話し合いの目当てを提示したり、教師が全体に理解させたい意見が出たときは、その内容を大きく取り上げたりと、主に発言内容に重きを置きながら指導することが多かった。しかし、子どもの側から見れば、このような教師の姿勢は、「自分の考えは、友達と同じか、違うか」「自分の考えは、先生が求めるものなのか、そうでないものか」などという淡白な聞き方を助長する恐れがあり、ややもすれば友達の意見を批判的に受け止める雰囲気につながりかねないのではないだろうか。

このように考えると、時間的な制約も少なく、方向目標のみが示されている総合においては、一般教科に比べ、比較的、共感的な「学び合い」の授業を成立させやすいと考える。また、図12 ※2にあるY児の発言は、「友達の意見と同じか、違うか」という聞き方をしている、絶対に生まれない思いである。このことから、仲間の発言を丸ごと理解しようと共感的に聞く姿勢は、総合でこそ大切にしていける必要があると考える。

2 総合の学習が、仲間のよさを認め合う学級づくりに本当に効果があったのか

Vの結果の検証2(2)で述べたQUの結果③においては、「運動や勉強等でクラスの人から認められたことがある」が、総合を行う前と比べ、13/36人(約36%)の子どもたちが、数値を高めていることが分かった(図33 ※太線)。以下に、

全員分の変容を図で記す。



【図33. QUの結果③の全員の変容図】

図33から、これまで、クラスの人からあまり認められていないと感じていた子の9/11人(約82%)が3月には数値を高めていることが分かった(図33 ※1)。また、理由を聞いてみると、7/9人(約78%)の子に、総合に関する記載があることが分かる(図34)。

- 自分だけ、外れるのは嫌だと思っていたけど、総合をしていて別にいいと思えるようになった。活動が認められ自信が出てきた。(5)
- 新町探検では、友達や地域の人などいろいろな人と話せるようになったからそう思う。(7)
- 2学期の総合で、昔、おとの様が通っていた道を、毎朝がんばってゴミ拾いをしていることが、みんなに認められたから。(8)
- 私は、転校生だったけど、総合で校区のことを勉強して、いろいろなことが分かって、みんなと同じになった。(20)
- 総合で調べたことを発表できたときに感じた。(25)
- 総合でいろいろインタビューして、いろいろ調査したら。(27)
- 総合でみんなと一緒に出かけたり、説明しあったりしているうちに、認められるようになった。(29)

【図34. クラスの人から認められるようになったと感じた理由 ※数字は児童番号】

また、Vの結果の検証1(3)の単元終了後の振り返りカードを見ると、図34に示した7人は、いずれも振り返り①~③をしっかりと書くことができ、充実した探究を行うことができていたことが分かる(資料1の※1~※7)。

これらのことから、これまで、あまり認められなかった子どもも、自分なりの問題を、自分のペースで十分に探究できたことから、総合が仲間から認められる要因の一つになったと考えられる。

とかく高学年になると、到達目標がある教科の

学習においては、個人差も大きい。その意味において、到達目標がない総合においては、一人一人が自分の持ち味を発揮しながら取り組むことが可能であり、互いを認め合う学級づくりの要因として大きな効果が期待できると考えられる。

3 探究を深め、自己の生き方を見つめる自己評価

一人一人の探究を前進をさせていく上で、継続的な自己評価は欠かせない。今回の事例では、Vの結果の検証1(1)のアンケート⑤「友達のふり返り(自己評価)から、自分の取り組みについて考えることはありましたか」では、28/36人(約78%)の子どもが「考えることがあった」と答えており、さらに多くの子どもが、「〇〇さんは、自分に厳しいな。ぼくは、ちょっとでもしたら赤(活動ができた)シールをはっていた。見直したい。」と、これまでの自分の自己評価の仕方や活動そのものを反省的に見直す姿が見られた(図22)。

総合においては、自己評価の物差しが、子どもに委ねられているということ、子ども自身が自己評価の目当てを組み替えながら探究を進めていくことが、目指す子どもを育てる上で大切である。その意味において、自己評価の充実と探究の充実が表裏一体であり、総合だからこその「生き方」に直結する自己評価のあり方について今後も明らかにしていく必要がある。

4 学級経営からみた総合存在の意義

ここまで、一人一人の探究の充実や学級内における多様な学び、そして、仲間の発言を共感的に受け止める子どもの聞く構えが、認め合い、学び合う集団づくりにつながることで、また、探究の充実には、主観的な自己評価と、互いの自己評価を仲間と聞き合う場を設定することが大切であることについて述べてきた。

最後に、本論文のまとめとして、改めて学級経営における総合の価値について考えてみる。

総合は、一人一人の主体的な問題解決、つまり「探究」が前提になっている。これは、「望ましい集団活動」を前提に、子どもの主体性や社会性を育てる特別活動とは、その性格を異にするものである。とりわけ、一人一人の価値観が大切にされる総合においては、集団という枠の中から仲間を見つめるのではなく、まさに、よりよく生きよう

と願う一人の人間として、全ての仲間を共感的に見ることができるといえるのではないだろうか。アメリカの心理学者アブラハム・マズローは、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生き物である」と仮定し、人間の欲求を5段階の階層で理論化しているが、その中でも、自分のもつ能力や可能性を最大限に発揮し、自分になりえるものになりたいという自尊的欲求は、人間の基本的欲求の中でも、もっとも高次なものであると述べている(Maslow1967⁽¹⁰⁾)。つまり、生来、人間には自己実現に向かって成長したいという願いや思いが必ずあり、それを互いに尊重し合ったり、認め合ったりできることが、最も居心地のよい空間になりえるということではないだろうか。さらにマズローは、この自己実現について、個人の健全性と社会の健全性は一体化するものとして捉えており、「協働」の姿勢が、より個人の満足感を高めるとも述べている(Maslow1967⁽¹¹⁾)。その意味において、共通テーマの下、自分の問題を、自分なりの方法で納得がいくまで追究できることが保障されている総合の時間は、まさに、人間の基本的欲求を満たし、社会の中で自己実現を目指していく礎になるといえると思う。

よりよい集団とは何か。価値観が一律共通ではなく、一人一人の違いが尊重され、互いを認め合い、高め合える集団ではないだろうか。また、総合の理念がこのような集団の理念と一致することから、学級経営と総合を表裏一体の関係として捉え、今後も一層授業研究を進めていく必要があるといえるのではないだろうか。

VII 結論

学級経営における総合の価値は、一般教科に比べ、一人一人が自分のもち味、個性を十分に発揮しながら学習に取り組むことができるという点、また、子ども同士が互いを認め合い、高め合うような「学び合い」の授業が成立しやすいという点にあるといえる。

「学び合い」を成立させる要因は、次のように集約することができる。

- (1) 一人一人が、自分で決めた問題に対して、本気の追究を行ってきているということ。
- (2) 共通テーマのもと、子ども一人一人が個人的に追究し、多様な学びを携え、そのことを自覚

しているということ。

- (3) 全員が追究の土台としている「共通テーマ」を話し合いの話題に設定するということ。
- (4) 仲間の発言に対しては、発言内容だけでなく、発言者そのものを理解させるような発問の工夫を工夫し、子どもたちの共感的な聞く構えを育てるということ。

VIII 残された問題

- (1) 今回の実践だけでなく、他の単元や他の学級においても、尾島級のような一人一人の探究の充実するような総合の実践を継続的に行うことで、互いに認め合い、高め合うような学級づくりにつながっていくのかを検証していく必要がある。
- (2) 学級経営の充実は、総合だけでなく、全ての教育活動とも関連付けて考えていく必要がある。そのことを前提に置きながら、よりよい集団づくりと総合の因果関係について今後も検証していく必要がある。

直す話し合いを支える教師のはたらき」せい
かつか&そうごう第16号 110

- (7) 飛弾直樹・尾島良幸(2012)「日本生活科・総合的な学習教育学会第21回全国大会徳島大会発表要旨・指導案要項集」161
- (8) 河村茂雄(2012)「学級づくりゼロ段階 (QU式学級づくり入門)」図書文化 23
- (9) 松本謙一(2002)「問い直したい『話し合い』観」日本生活科・総合的学習学会編『せい
かつか&そうごう』第9号 初教出版 99
- (10) アブラハム・H・マズロー (1967)「自己実現の経営 (経営の心理的側面)」産業能率短期
大学出版部 13
- (11) アブラハム・H・マズロー (1967)「自己実現の経営 (経営の心理的側面)」産業能率短期大
学出版部 8

(2013年10月18日受付)

(2013年12月11日受理)

【謝辞】

研究を進めるにあたり、授業実践他、長期にわたって総合と学級づくりとの因果関係を共に考えてくださった前富山市立古里小学校(現、舟橋村立舟橋小学校)尾島良幸先生、研究が深まるように多くの便宜を図ってくださった林真務校長先生(現、富山市立堀川南小学校)をはじめ、職員の皆様には心より感謝申し上げます。

【引用文献・参考文献】

- (1) 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」東洋館出版社 16-17
- (2) 田村学・原田信之(2009)「リニューアル総合的な学習の時間」北大路書房 99
- (3) 北村善重(2007)「総合学習はPISA型読解力が鍛えられ身に付く実践の場である」授業研究21 2007年9月号 明治図書 51.52
- (4) 渡辺沙織(2010)「生活科・総合的な学習の時間に見られるキー・コンピテンシーの具体の姿」せい
かつか&そうごう第17号 98-105
- (5) 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 特別活動編」東洋館出版社 8
- (6) 尾島良幸・松本謙一(2009)「『生き方』を見

資料1. 児童36人分の追究分析（単元終了後の振り返りカードから）

①・ _____ は学習前の思い ・ _____ は学習後の思い ②・ _____ は考え方が変わった根拠
 ③・ 太字は学んだこと、考えたことなど

| No | ①学習を終えて、今、古里校区のことをどう思っていますか | ②考え方が変わった一番の理由 | ③学習を終えて学んだこと、考えたこと | 考 察 |
|----|--|---|--|--|
| 1 | 学習を始める前は、古里校区のことを歴史はあるけどくらい（さみしい）と思っていたけど、今は、町は変わっていないけど、人が変わった（明るくなった）と思うし、あいさつの力はすごいなと思っている。 | これまで、進んであいさつをしようと思っていなかったけど、長沢で、たまたまあいさつをしたら、優しい顔であいさつを返してくれたから。 | 今までは、あいさつをして何になるんだろうと思っていたけど、今では「あいさつ」ってとてもすてきなまほうみたいだなあと思うようになった。 | 最初は、ファボーレのような大型店があるにぎやかな校区を目指していたが、長沢探検で、地域の方から優しくあいさつを返してもらった経験から、にぎやかさよりも人との関わりが大切だと感じるように変化した。 |
| 2 | 学習を始める前は、古里校区のことをどこにもある普通の校区だと思っていたけど、今は、 <u>たくさん</u> の伝統や歴史がある世界に一つしかないすてきで大事な校区だと思ひ、ゴミ拾いや地域の人のことを手伝ってあげたりして、校区を守りたいと思っている。 | 放課後、Oさんと沢村酒店さんにお手伝いに行った時、お仕事の大変さが分かった。だけど、 <u>沢村さんは、お客様の笑顔を見ればがなばれると喜んでおられたのでそう思いました。</u> | 前、ごみが落ちていても気にならなかったけど、今は、小さいゴミでもかなり気になって近くのゴミ箱に捨てるようになった。 | 最初は、古里校区のことを、どこにもある普通の校区と考えていたが、地域のためにがんばっている沢村さんと関わることを通して、これまで以上に地域への愛着を深めた。 |
| 3 | 欠席 | | | |
| 4 | 学習を始める前は、古里校区のことをそんなに立派でもないけど、友情がすごいなあと思っていた。今は、 <u>とっても歴史あふれる校区</u> なんだなあと思っています。わけは、くわしく調べていると、魅力がたくさんでてきたからです。ほくは、各願寺へ続く坂道についてくわしく調べました。どうせ、すごいことなんて見つからないよ、と思っていたけど、調べているうちに歴史があふれる校区なんだなあと心から思っている。 | 各願寺のことを調べていたら、 <u>各願寺へ続く坂道は、約1300年前の道だとわかって、とっても古いと感じて、歴史がたくさんあるんだなあということが分かったから。</u> | 今まで、ただの全然すくなくない校区だなあと思っていて、もっともっと成長しろよ！と思っていた自分だけど、校区のみんなが力を合わせて、のりこえることが大切に思えるようになってきた。 | 最初は、古里校区のことをごく普通の校区だと思っていたが、各願寺の道を調べる活動を通して、歴史ある素敵な校区だと思えるようになった。今ある歴史を残すために、みんなで協力することが大切だと感じ始めた。 |
| 5 | 学習を始める前は、古里校区のことを田舎と思っていたけど、今は、 <u>田舎だけど、おばあちゃんがあいさつしてくれたり、野菜やおかしをくれる、話しかけてくれるやさしい人がたくさんいる古里校区</u> だと思っている。 | <u>いつもあいさつをしていたら、ものをくれたり、話しかけてくださったりしたから。</u> | スーパー1つだけで、何も無いと思っていたけれど、話かけてくださる人がたくさんいるから、人を大切にしていきたい。 | 単元に入る前は「古里校区は田舎だと思う。都会のほうがいい」と作文に書いていた。しかし、道調べの中で、地域の人と関わることを通して、都会的なにぎやかさよりも、人との触れ合いを大切にしたいと感じるようになった。※1 |
| 6 | 学習を始める前は、古里校区のことを緑がとってもきれいな町ですごく楽しそうな町と思っていたけど、今は、 <u>すごくいろいろなものがある歴史のある古里校区</u> だと思って、 <u>すごく楽しいという町</u> だと思っている。 | ほくは、 <u>長沢へ行って、昔はとっても店が多くてにぎやかで、もともと古里校区を知りたくなったから。</u> | 緑と楽しいだけだと思っていたけど、昔はお店が多くて、しかも笑顔になることが大切なんだなと思った。 | 最初は、緑がとってもきれいな校区だと考えていたが、3回の長沢探検で、昔の長沢にはお店が多くあり、すくなくにぎやかだったことを知り、古里校区を歴史的なおもしろさのある楽しい校区だと感じるようになった。 |
| 7 | 学習を始める前は、古里校区のことをとてもやさしくて楽しい古里校区だと思っていたけど、今は笑顔とあいさつがあふれる古里校区だと思っています。おしいちゃん、おばあちゃんとお話するのがとても楽しいです。「あいさつが上手になったね」とほめてくれたり、やさしい言葉で話をしてくださったりするからです。 | <u>笑顔であいさつする人を増やせたから、ほめてくれる人も増えたから。</u> | 笑顔が少なかった校区だけど、今は笑顔があふれる校区になったと思いました。 | 古里校区については、「とてもやさしくて楽しい校区」と最初から満足していたが、各願寺周辺の道や遺跡を調査する中で、地域の人の笑顔に出会い、「笑顔とあいさつがあふれる校区」であると、さらに校区への愛着を深めた。 ※2 |
| 8 | 学習を始める前は、古里校区のことをたくさんのおもしろい人たちがいるすごい校区だなあと思っていたけど、今は、 <u>歴史深い、すばらしい校区</u> だなあと思っている。 | 小長沢の道を調べているとき、 <u>ますいさんにインタビューに行き、小長沢には、お殿様が通った道があることや小長沢は昔からあるということを知ってそう思いました。</u> | 小長沢のいいところがいっぱい分かって自分でも満足だと思います。 | 自分が住んでいる小長沢の道を調べる中で、昔、お殿様が通った道があることを知り、これまで以上に小長沢が好きになった。また、自分の取り組み自体にも満足している。 ※3 |
| 9 | 学習を始める前は、古里校区のことを車がいっぱい通ってなくて安全だけど、もうちょっとお店があればと思っていた。でも、今は、 <u>お店は別にあまりなくてもいい。</u> | <u>寺家美容院さんは、「昔は昔でいい」と言われていて、別にお店は増えなくてもいいと思っている。だから、私もそれを聞いて、あまりお店がなくてもみんなが笑顔ならいいんじゃないかなと思いました。</u> | お店があっても、人が多すぎると車が増えて危ないので、なくてもよかったです。 | 最初は、お店が多いにぎやかな校区がいいと思っていたが、長沢のお店の数と交通量の関係を調べる中で、校区の安全性に目を向けるようになり、現状のままよいと感じるようになった。 |

学級経営からみた総合的な学習の時間存在の意義

| No | ①学習を終えて、今、古里校区のことをどう思っていますか | ②考え方が変わった一番の理由 | ③学習を終えて学んだこと、考えたこと | 考 察 |
|----|--|---|--|--|
| 10 | 学習を始める前は、古里校区のことを静かな校区、あまりにぎやかでない(例えば相手があまりあいさつをしなかったりすること)と <u>思っていたけど、今は、いっしょうけんめいがんばっている校区だと思っています。</u> | 長沢探検に行った時に、 <u>みんなのためにいっしょうけんめいお店をがんばっておられたから。</u> | 最初は、校区のことをよく知らなくて、自分がよければそれでいいと思っていたけど、(大げさにいえば)校区のためにがんばることも大切なことだと思いました。 | 最初は、もう少し活気があるにぎやかな校区がよいと思っていたが、長沢で一生懸命お店を開いている人の思いを聞く中で、自分だけでなく、人のためにがんばることが大切だという、「人の生き方」のよさに気がき始めた。 |
| 11 | 学習を始める前は、古里校区のことを歴史のあまりない町かと思っていたけど、今は、 <u>とって歴史があるし、校区の人みんながやさしくていい校区だ</u> と思っています。婦負郡の中心で、色々な古らんがあり、昔の人たちの考えなどが残っていて、すてきな町だと思います。 | 各願寺や古らんがあるということを知って、 <u>そんなに古い建築物があるのか、歴史が長沢にはあるんだ</u> と思った。これが考え方が変わった一番の理由です。 | 歴史のことを知ることができたので、いいなと思いました。 | 古里校区がもっと有名になって栄えてほしいと考えていたが、各願寺や長沢城など校区にある古い建築物の存在を知ることによって、今ある校区のよさを残していくことが、より大切だと思うようになった。 |
| 12 | 学習を始める前は、古里校区のことを高いビルや建物がなくて、周りを見渡せていない <u>あと</u> 思っていたけど、今は、 <u>車が多いから事故が起きないでほしい</u> と思っている。 | 一緒に車の交通量を調べていた <u>Kさんのまとめを聞いた</u> り、 <u>自分で調べたりしてそう思った。</u> | 周りの人のことをぜんぜん思っていなかったけど、人のことを思うことも大切なんだと思う。 | 車の交通量調べから旧道と新道を比べ地域の人々が一層安全に生活できることが大切だと思うようになった。 |
| 13 | 学習を始める前は、古里校区のことを店などが少なくてさびしいところだと思っていたけど、今は、 <u>店を開いている所は少ないけれど、昔はとても活気があった町</u> と知り、 <u>すこい校区だ</u> と思っている。 | 長沢探検で、昔マップを見て、 <u>旅館なども合わせて42店ものお店があったから。</u> | お店が「ある・ない」でさびしい、さびしくないを決めていたから駄目だと思う。 | 古里校区を店がないさびしい所と考えていたが、過去の長沢に42もの店があったことを知り、校区に対する見方を大きく変えた。今の現状だけを考えて、さびしい、さびしくないを決めていた自分を反省している。 |
| 14 | 学習を始める前は、古里校区のことを建物が少なくてさびしい所と思っていたけど、今は、 <u>地域の人の笑顔やさしさがあふれている所</u> と思っている。 | 新町探検のときに、 <u>各願寺へ行って、曲水のえんのことについて聞き、気持ち動きました。</u> | 最初は、建物が少なくて、さびしいと思っていたけど、②のようなことからさびしいところではないということに気が付き、とても悔しい思いました。 | 最初は、もっと大きな建物があって、にぎやかな校区がいいと思っていたが、伝統行事で校区を盛り上げている人の生き方に触れる中で、建物という一面的な見方でしか校区のことを考えられなかった自分に気が付き、自分の考え方を反省し始めた。 |
| 15 | 学習を始める前は、古里校区のことを親切な人がたくさんいるけど、 <u>田・畑がいっぱいある田舎だ</u> なあと思っていた。でも今は、 <u>なんとしてもお店をやりたい</u> と言う人がいるのを知って、私は「 <u>とても自まんが</u> できる町だなあと思っている。 | 沢村酒店の沢村よしかずさんが、 <u>道を知らない人に道を教えてあげてくれた</u> からです。沢村さんは、「 <u>そんな人たちのために</u> も店を続けたい」と言っておられました。 | 最初は、都会みたいな町がいいと思っていたけど、今は、こんな田舎の町でも都会の町よりぜんぜんいいと思っている。最初の自分は、地区の人の苦勞も知らないで、少し都会になってほしいと思っていた。けど、考え方が変わってよかつたと思う。 | 地域のために、今もなお店を営業し続ける沢村さんの生き方に触れる中で、これまで以上に自分の地域に誇りをもつようになった。また、自分の考え方の変容をうれしく思っている。 |
| 16 | 学習を始める前は、古里校区のことを空気が汚れていないし、じまんでる人もたくさんいるので、 <u>とても大好きだ</u> と思っていたけど、今は、 <u>どんどんあいさつをしてくださる人もいるし、どんどん笑顔になっていて校区全体が笑顔になっているので、今の古里校区は好き</u> です。でも、前よりは、ゴミがたくさん置いてあったりするので、そのゴミなどを拾ってゴミをなくしたいと思っている。 | <u>ずっと前は、みんなあいさつをしなくて、笑顔が消えていたけど、今は、みんながあいさつをしていて、笑顔に戻っているから</u> です。 | 私は、「あいさつ」をされても無視をずっとしていました。なので、笑顔が消えていて、古里校区が暗くなっていました。だけど、あいさつをして、笑顔が戻ると、古里校区が明るくなったので、 <u>笑顔が大切なんだ</u> と思いました。 | もっと地域を明るくしたいと思い、取り組んだあいさつ運動で、自分がいつも笑顔でいること自体が地域の明るさにつながると、その価値を自覚し始めている。 |
| 17 | 学習を始める前は、古里校区のことをもうなんにもない所で、じみすぎて楽しいと思っていたけど、今は、 <u>自立つもの</u> などはないけど、 <u>総合の最後に大切だとわかった「人と人のつながり」</u> があふれていて、 <u>じみじゃなく、明るい校区だ</u> と思います。人と人のつながりは、例えば、老人会の方々との交流、地域の人に感謝する会でも、もてると思います。 | 今ふりかえれば、 <u>老人会の方とふれあい活動したら、笑顔で帰っていかれて、明るくなっていき、意味のあるふれあい活動がたくさんできた</u> から。 | 最初は、建物などの見た目だけで、校区を考えていたけど、ちゃんと校区の中身を見ることが大切だと思うようになりました。 | 最初は、建物を増やすことで校区を明るくしたいと考えていたが、質問に答えてくださった老人会の方との触れ合いを通して、人と人のつながりが明るい町づくりに大切だと実感するようになった。 |
| 18 | 学習を始める前は、古里校区のことを <u>ファボーレ</u> みたいに、大きな建物は静かな校区と思っていたけど、今は、 <u>大きな建物はないけど、店を残そうとがんばっている人がいる</u> ということが多い校区と思っている | だれかが、調べたことを発表したときに、 <u>店を残そうとがんばっている人がいる</u> ということを聞いたからです。 | 静かな町だと思っていたけど、みんなのためにがんばっておられる人が多いんだなと思いました。 | 最初は、ファボーレのような大きな建物があるにぎやかな校区がいいと考えていたが、地域のために、お店の経営をがんばっている方がいることを知り、改めて校区に住む人の思いに目を向けるようになった。 |
| 19 | 学習を始める前は、古里校区のことを、静かなところだなあと思っていたけど、今は、 <u>自分からあいさつをできるように</u> なったし、自然に地域の人としゃべることもできるようになったので、 <u>あいさつは本当に大切</u> なんだなあと思いました。 | わからない。 | 前は、はずかしいから、あいさつをしなくてもいいかと思っていたけど、あいさつの大切さが分かって自分からあいさつができるようになった。 | 江戸時代よりも前にできた道について調べる中で、地域の方ともたくさん関わることができた。校区に対する思いの変容は、はっきりしていないが、活動を通して、あいさつができるようになった自分自身の変容を自覚でき、うれしく感じている。 |

| No | ①学習を終えて、今、古里校区のことをどう思っていますか | ②考え方が変わった一番の理由 | ③学習を終えて学んだこと、考えたこと | 考 察 |
|----|---|--|---|---|
| 20 | 学習を始める前は、古里校区のことをあまりお店、人がいない所だと思っていたけど、今は、長沢のために昔からお店をやっている人、やさしい人がいっぱいいてちゃんとあいさつもしてくれて、なによりわたしたちを一番大切にしているところだと思う。 | わたしは、どうしてこう思ったかという、福田たみ店の人にインタビューしたら、「今、 <u>仕事だから</u> と言われて、 <u>そんなに長沢のためにお店をしているのか</u> と <u>思った</u> からです。 | 最初、あまりお店の苦勞がわからなかったけど、今は、お店の人に感謝するようになった。 | 最初は、人やお店が少ないさびしい校区だと感じていたが、長沢探検を通して、地域のためにがんばっている人の生き方に触れ、お店の人に感謝の心をもつようになった。 ※4 |
| 21 | 学習を始める前は、古里校区のことをすてきな、きれいだなと思っていたけど、今は、笑顔であいさつをしてくれると心温かい校区だなと思っている。 | 校区のためのプラス1活動で、 <u>あいさつを続けているうちに、近所の人が今までにない笑顔であいさつをしてくれた</u> からです。 | きれいで、よかったですし、か考えていなかったけど、みなさんの心のやさしさも大切だと思えるようになりました。 | 最初は、校区の自然の美しさに目を向けていたが、お殿様が愛した道を調査する中で、地域の人の温かさにも触れることができ、人の心の優しさ、あいさつも大切だと感じるようになった。 |
| 22 | 学習を始める前は、古里校区のことを田舎だけどすごいと思っていたけど、今は、本当は悲しい事実があった所だと知りました。ファボーレや大きい建物ができたため、品物が売れなくて、やめるお店がいっぱいでできていました。今、残っているのは数件です。今は、 <u>さびしい古里校区</u> と思っている。 | 肉屋さんインタビューしたら、「 <u>いろいろな物はスーパーに行けば買える。でも、<u>いろいろなお店がやめられるようになった</u></u> 」と <u>言っておられた</u> ことです。 | 今までは、いなかだけど、すごいと単純に思っていたけど、いろんな事実についても考えることが大切と思うようになりました。 | 2回の長沢探検を通して、閉店する店がたくさんあるという事実を知り、地域の色々な事実や問題状況について深く考えることが大切だと思うようになった。 |
| 23 | 学習を始める前は、古里校区のことを宝物だと思っていたけど、今も校区はいつまでもいつまでも宝物です。この学校のおかげで、友達ができたし、みんなにも自分の名前を覚えてもらっているから、ほくもみんなの名前も覚えてるし、もし誰かが転校していても、名前はわかるから、いつまでも友達だから、とても大切な校区、学校なので、感謝している。 | 学習を始める前も後も、自分は校区のことをどう思っているかは変わらない。いつでも、どこにいても自分の考えは、同じ。 | 今も自分が大事だと思うことは、友達だと思ふ。わけは、友達がいない事は、いじめられるようになるんじゃないかと、これから、友達を作らなくてはいけなくて、それを乗り越えた人がとても達成感のあること、いじめられるんじゃないかと、友達を作れということだと思ふ。 | 最初から校区に対する満足感をもっており、切実な問題はなかなか見つからなかったが、活動を通して、友達など、人と関わりが大切だと改めて感じるようになった。 |
| 24 | 学習を始める前は、古里校区のことをすてきな校区だと思っていたけど、今も、 <u>すてきな校区</u> だと思っている。それに、歴史ある道もあって、興味深い校区だと思っている。 | 変わっていない。でも、とのさまが歩いた道があると知って、興味深くなった。 | いろいろなことが調べられて、分かって一歩前進したと思ふ。 | 学習を始める前も後も、すてきな校区というイメージは変わっていない。友達から、校区にお殿様が歩いた道があるということ聞き、校区のことをもっと知りたいと意欲をもつようになった。 |
| 25 | 学習を始める前は、古里校区のことをあまりすごい人なんていないのではないかと考えていたけど、今は、古里校区のすごい人の発表で、聞いたけど、 <u>すごい人がいっぱいいるんだ</u> なと思っている。 | 359号線調べで、長沢の人にインタビューしたら「 <u>時々あふないけど、車に乗る人が、いっぱいいるから仕方ない</u> 」と <u>言っておられた</u> から。 | 今までは、359号線は別にあっていいんじゃないかと思っていたけど、インタビューしてみると「あふないよ」と言っていたので、359号線ができて、本当によかったかと思うようになった。 | 最初は、359号線のことを深く考えていなかったが、昔と今の359号線を比較したり、交通量を調べたりする中で、安心して暮らせる校区について目を向けるようになった。 ※5 |
| 26 | 学習を始める前は、古里校区のことをとても自立できない地域だと思っていました。今は、すごい人がとてもたくさんいたので、ちっぽけな地域とは思わず、楽しく古里校区をまわって楽しんでます。今では、不思議がいっぱいの古里校区なんだなと思っている。 | インタビューした山本さんは「 <u>生活がとてもよくなった</u> 」と <u>言われ、うそ</u> という思いですが、郵便局さんと山本さんの思いがつかみあっていないので、よくわからないに変わりました。 | 古里校区の道には、なぞのことが多いから、とても楽しい校区に思えてきて、とても楽しくて家より外で遊ぶ時間のほうが、今は多いです。そのように、ほくは変わりました。 | 新道に寸断された立ち入り禁止の道について調べの中で、校区の人の思いが多様であることを知り、不思議がいっぱいの楽しい校区だと思えるようになった。 |
| 27 | 学習を始める前は、古里校区のことをただに普通にあいさつなどをしてくれる所だと思っていたけど、今は、 <u>大きな建物とかはないけど、やさしくして、あいさつをしたら返事をしてくれる所</u> だと思っている。 | お年寄り、遠くに行けない人のためにお店をがんばって続けておられるということがわかったから。 | ほくは、近くにスーパーがあった、生活ができていたけど、お年寄りの人や遠くに行けない人のことを知った。 | 最初は、普通の校区だと思っていたが、長沢に、お年寄りや遠出ができない人のために、店を開いている人の生き方に触れる中で、優しい校区だと感じるようになった。 ※6 |
| 28 | 学習を始める前は、古里校区のことをスーパーが遠くて、買い物をしに行くのが不便なので、大きい店があったらいいと思っていたけど、今は、古里にはフレックや片口屋などがあり、歩いて行ける店もあるので便利だし、 <u>木などがたくさんあって、とてもいい校区</u> なので大きい店はいらぬ。 | <u>大きな店があると、長沢で店をしているフレックや片口屋さんがすごく困って、お店の方から笑顔がなくなってしまう</u> から。 | 前までは、自分だけのことを優先していたけど、今やっているお店の人の考えを聞くと、みんなのことも考えることが大切だと思うようになった。 | 最初は、ファボーレなど、大型店がある校区がいいと考えていたが、長沢で小さな店を営む人の思いを知ることを通して、自分の生活のしやすさだけでなく、みんなのことを考えることが大切だと気付いた。 |
| 29 | 学習を始める前は、古里校区のことを自然がたくさんあるけど、ちょっと不便なところもあるなあと思っていたけど、今は、 <u>伝統的なものや行事がたくさんあるし、地域のためにがんばっておられる方もいらっしゃる</u> ので、とても歴史ある所だと思っている。 | 町探検に行った人たちのDVで、床屋の人が「 <u>店が少なくてもがんばらないと</u> 」と <u>言っておられた</u> ので、聞いて、変わった。 | 今までは、くらしやすさだけ考えていたけど、みんなで協力することが大切だと思った。 | 友達の追究の様子から、今もなお地域のために店を開いている人の思いを知り、みんなで協力して、校区をつくっていくことの大切さに気付いた。 ※7 |

学級経営からみた総合的な学習の時間存在の意義

| No | ①学習を終えて、今、古里校区のことをどう思っていますか | ②考え方が変わった一番の理由 | ③学習を終えて学んだこと、考えたこと | 考 察 |
|----|---|--|---|---|
| 30 | 学習を始める前は、古里校区のことを人、建物、土地一つ一つに歴史があり、昔はあったけど、今は、もうないもの、昔からずっと残っているもの、その一人一人の気持ちがこの古里校区をつくっている。今も、前もそう思っている。 | 分からない | 長沢探検やインタビューをして、建物の歴史だけでなく、人の気持ちや思いについても考えることが大事だと改めて思った。 | 最初から、校区の歴史についてよく知っており、校区に対しては「今のままでよい」と考えていたが、長沢探検を通して、改めて地域の人の思いについて考えることが大切だと気付いた。 |
| 31 | 学習を始める前は、古里校区のことを当たり前にあるところと思っていたけど、今は、そんな当たり前ところに、えらいお殿様を通ったことで、とてもいい町だと思っ | 増井さんにインタビューして、私の家の前に昔、お殿様を通ったことと、それは大事な道だったことを聞いたから。 | 今までは、道のことを調べるのが、めんどくさいと思っていたけど、実際に調べてみると、人の歴史があった。地区を調べることも大切だと思う。 | 最初は、切実な問題意識がなかなかもてなかったが、地域の方に、お殿様が愛した道のことを教えていただいたことをきっかけに、校区の道について調べることの楽しさを見いだした。 |
| 32 | 無答 | 分からない | 無答 | なかなか課題が決まらず、インターネットを眺めていることが多かったが、長沢探検で、自分の家(寺)が650年前からあると聞き、校区の歴史に興味をもつようになった。 |
| 33 | 学習を始める前は、古里校区のことをどこにでもある普通の町だと思っていたけど、今は、自然や文化を大事にする町だと思っ | 藤谷さんが、かげで白鳥のことを思いやり、お世話していたこと。 | 毎年、白鳥がくるのを当たり前と思っていたけど、藤谷さんのおかげで、毎年きれいな白鳥を見られると思う。 | 最初は、普通の校区だと考えていたが、白鳥が来る山田川の清掃をしている人の生き方に触れる中で、地道に活動する人への感謝の気持ちと、自然や文化を大事にするという校区へのイメージを高めた。 |
| 34 | 学習を始める前は、古里校区のことを田舎でじみで、特に目立たない校区だなあと思っていたけど、今は、地域の人がとても元気で明るくやさしい校区だと思っています。今やっているプラス1活動のあいさつも、最初は「おはよう」と言うだけだったけど、だんだん「今日寒いよ、なぜひかないようにしてね」と話しかけてくれてうれしかったです。だから、地域の人がとても仲良しな校区で地域の人がとても元気で明るくやさしい校区だと思っ | プラス1で、あいさつをしていたら話しかけてくれたこと、長沢探検でたみやさんが、「ファボーレとかができて、あんまりはん感しなくなっただけど、長年来てくれる人や知り合いで、いつも来てくれる人がいるからお店を続けている」と言っておられたから。 | 前は、大きい建物があって、にぎやかな校区がいいなと思ったけど、今は、地域の人が笑顔で明るく元気でいてくれること、人との付き合いが大切なんだなと思いました。 | 最初は、大きな建物など、都会的なにぎやかさを求めているが、長沢探検で、地域の人の思いを知るを通して、人との付き合いや地域の人の明るい笑顔が大切だと感じるようになった。 |
| 35 | 学習を始める前は、古里校区のことを田舎だと思っていたけど、今は、町中がきれいになってきて安全だと思っ | 山本さんにインタビューしたら、新道ができて人通りがすくなくなっただけど、事故が減ってよかったといっておられたこと。 | ぼくは、田舎でいいなと思っていたけど、もっともっとがんばることが大切なんだと思うようになった。 | 新道に寸断された立ち入り禁止の道について調べる中で、校区の人の思いが多様にあることを知った。色々な人の思いを考慮して、町をつくっていくことの大切さを感じるようになった。 |
| 36 | 学習を始める前は、古里校区のことを田舎になってほしいと思っていたけど、今も、田舎になってほしいと思っ | 分からない。 | ぼくは、今も田舎になってほしいと思っています。 | 新道ができる前と後で、地域の方がどんな思いをもっているのかを意欲的に調べた。その中で、今ある自然を大切にしたいという思いを深めた。 |